

2019 年度

講義要項

子ども教育学研究科子ども教育学専攻
修士課程

埼玉学園大学大学院

目 次

教育人間学特論（吉野 剛弘）	1
子ども発達特論（高橋 誠）	2
学習心理学特論（中本 敬子）	3
発達障害支援特論（増南 太志）	4
子どもと家庭支援特論（杉浦 浩美）	5
学校マネジメント特論（葉養 正明）	6
多文化子ども教育特論（堀田 正央）	7
教育方法学特論（浦野 弘）	8
教育実践研究特論（梅澤 実）	9
カリキュラム開発特論（久保田善彦）※	10
教育メディア特論（森田 裕介）※	11
子どもの言葉特論（細川 太輔）	12
子どもの数・図形概念特論（齋藤 昇）	13
子どもの科学認識特論（長友 大幸）	14
子どもの造形表現特論（森本 昭宏）	15
子どもと道徳特論（吉村日出東）	16
小学校授業実践演習（梅澤 実・細川 太輔）	17
幼稚園教育実践演習（高橋 誠・馬場 結子）	18
教材・環境開発演習（長友 大幸・森本 昭宏）	19
いじめ・自殺・不登校問題演習（増南 太志・吉野 剛弘）	20
地域連携プロジェクト演習（堀田 正央・杉浦 浩美）	21
教育課題研究Ⅰ（梅澤 実）	22
教育課題研究Ⅰ（長友 大幸）	23
教育課題研究Ⅰ（吉村日出東）	24
教育課題研究Ⅰ（浦野 弘）	25
教育課題研究Ⅰ（堀田 正央）	26
教育課題研究Ⅰ（増南 太志）	27
教育課題研究Ⅰ（吉野 剛弘）	28
教育課題研究Ⅱ（梅澤 実）	29
教育課題研究Ⅱ（長友 大幸）	30
教育課題研究Ⅱ（吉村日出東）	31
教育課題研究Ⅱ（浦野 弘）	32
教育課題研究Ⅱ（堀田 正央）	33
教育課題研究Ⅱ（増南 太志）	34
教育課題研究Ⅱ（吉野 剛弘）	35
教育課題研究Ⅲ（梅澤 実）	36
教育課題研究Ⅲ（長友 大幸）	37
教育課題研究Ⅲ（吉村日出東）	38
教育課題研究Ⅲ（浦野 弘）	39
教育課題研究Ⅲ（堀田 正央）	40
教育課題研究Ⅲ（増南 太志）	41
教育課題研究Ⅲ（吉野 剛弘）	42

< 隔年開講科目の開設年度 >

科目名	H31 年度	H32 年度	H33 年度	H34 年度
カリキュラム開発特論	○		○	
教育メディア特論	○		○	

授業概要

現代の教育は学校という巨大な装置に支配されていることは否定のしようがない。一方で、教育学は学校教育のみを扱っているわけでもないし、教育人間学に代表されるような基礎学はそれを相対化する側面を有しているとすら言える。近代学校制度の功罪についてはさまざまな考えがあるが、現代の我々の人間形成は、学校との対峙抜きに考えることは不可能に近い。

そこで、本科目では、人々が学校というものにどのように対峙してきたのかを軸に、人間形成のありようを検討していくことにする。

授業計画

第1回	オリエンテーション:ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけと授業のねらい
第2回	教育学と近代学校制度 (1):近代学校制度の成立と教育学
第3回	教育学と近代学校制度 (2):近代学校制度の相対化と教育学
第4回	近代学校制度の特徴 (1):欧米を中心に
第5回	近代学校制度の特徴 (2):日本を中心に
第6回	学校化と学歴社会 (1):ドーアの議論を中心に
第7回	学校化と学歴社会 (2):学校化社会の展開
第8回	脱学校論の起こりと展開 (1):イリイチの議論を中心に
第9回	脱学校論の起こりと展開 (2):学校の相対化の展開
第10回	近現代日本における学校と人間形成 (1):学校秩序の拒絶
第11回	近現代日本における学校と人間形成 (2):学校秩序の消極的受容
第12回	近現代日本における学校と人間形成 (3):学校秩序の積極的受容
第13回	近現代日本における学校と人間形成 (4):学校秩序への積極的参画
第14回	近現代日本における学校と人間形成 (5):大衆教育社会における学校
第15回	授業のまとめ
第16回	

到達目標

- ・教育、人間について、人間学的、歴史的に相対的考察ができる。
- ・教育人間学の専門的知識を習得した上で、人間、社会、子どもにとっての望ましい文化、幸福について新たな知見を獲得し、教育実践に適用できる。

履修上の注意

履修者には毎回指定文献（本の一部ないし学術論文）を必ず読んでこななければならない。授業は、担当教員による指定文献に関わる説明を最初に行うが、あくまでディスカッションが授業の中心である。

評価方法

授業内のディスカッションの参加度 (50%)、期末レポート (50%)

テキスト

授業の進行に応じて、必要な文献を複写の上配付する。

授業概要

はじめに発達心理学の主要理論について講義する。さらに発達心理学や臨床発達心理学、家族心理学の実証的な研究による最新の知見を用いて、子どもの発達に影響を与える様々な要因について理解・洞察を深める。それぞれの理論や研究を理解し、議論を深める中で、受講生各自が子どもの発達にまつわる具体的問題を分析し、その対処方法について考え、それらを教育実践に活かそうとする視点を身に付けることを目標とする。

授業計画

到達目標

1. 子どもの発達に関する主要理論と重要概念の理解・習得すること
2. 子どもの発達のプロセスとそれに影響する要因を理解すること
3. 子どもの発達に関わる具体的問題を分析・探求する視点を獲得すること
4. 子どもの発達に関わる具体的問題への対処方法について実践的に理解すること

第1回	オリエンテーション
第2回	認知・知能に関する基礎理論
第3回	認知・言語領域の発達心理学の理論
第4回	社会・情動・自己領域の発達心理学の理論
第5回	発達のプロセスと発達の促進・保護・阻害要因
第6回	生涯発達の視点と早期保育
第7回	発達研究からの知見：教育と発達に関する基礎
第8回	発達研究からの知見：発達を促す教育
第9回	家族研究からの知見：保護者と子どもの発達
第10回	家族研究からの知見：家族と子どもの発達
第11回	家族研究からの知見：社会と子どもの発達
第12回	臨床発達心理学からの知見：発達における脆弱性
第13回	臨床発達心理学からの知見：発達におけるレジリエンス
第14回	臨床発達心理学からの知見：発達の問題と発達支援
第15回	臨床発達心理学からの知見：社会構築主義と障害支援
第16回	筆記試験

※受講者の興味関心や進度に応じて一部変更を行う場合があります。

履修上の注意

配布資料や参考文献を予習・復習すること。

教育実践や実習、身近な問題などと本授業内容を関連づけながら、各自がその考察をノートにまとめ、その考察を更に探求するといった、授業と実践を結びつける視点を持って授業に臨むこと。

評価方法

主要な発達理論と重要概念の習得、及び、子どもの発達に関わる具体的問題を探る視点と問題対処の方法について小テスト（20%）、小レポート（20%）と筆記試験（60%）で評価する。

テキスト

毎回プリント資料を配布する。

参考文献も適宜紹介する。

授業概要

幼稚園及び小学校のミドルリーダーには、幼児児童の学習を支援するため、体系的な教育実践を構想する力が必要である。そこで、本科目では、幼児期から児童期にかけての発達や学習の基本現象や理論を習得した上で、これらに基づいて教育実践の事例を分析的に捉え、より効果的な指導や学習環境について具体的に考察していく。授業では、基本現象や理論の習得については講義と文献読解を、事例分析等については受講生による発表と討論を中心として進める。

授業計画

到達目標

1. 知識やスキルの習得のメカニズムを心理学的観点から理解する。
2. 乳幼児期から児童期にかけての知的発達と学習との関連を基礎理論を踏まえて理解する。
3. 授業等における幼児・児童の学習を分析的に検討する力を身につける。
4. 幼児・児童の学習を支援するための授業や学習環境をデザインするための手がかりを得る。

第1回	イントロダクション（本授業とミドルリーダーとしての力量と授業のねらい、授業の進め方。受講生の学習観の確認）
第2回	学習の基礎理論（行動主義，認知主義，状況主義）
第3回	情報処理モデル（記憶のマルチストアモデル，ワーキングメモリ）
第4回	知識の表象（概念とカテゴリー，スキーマ，スクリプト）
第5回	知識の構成過程としての学習（認知的構成主義，社会的構成主義）
第6回	発達の観点から見た学習（思考の発達に関する基礎理論）
第7回	言語，数学的概念，科学概念の発達（語彙と文法規則の発達，数唱方略と数概念の発達，科学概念の変容）
第8回	メタ認知（学習におけるメタ認知の役割，メタ認知の発達）
第9回	学習を支援するための学習環境のデザイン（問題解決型学習，協働学習，形成的フィードバック）
第10回	幼児期における他者とのやりとりに基づく学習に関する事例分析
第11回	幼児期における体験に基づく学習に関する事例分析
第12回	児童期における数的概念の学習に関する事例分析
第13回	児童期における科学概念の学習に関する事例分析
第14回	児童期における言語力の育成に関する事例分析
第15回	展望（今後の学習支援のあり方についての検討）

履修上の注意

履修にあたっては、これまでに受講した教育心理学や学習心理学関連の授業内容を確認しておくことが望ましい。また、各回の授業で予習や発表準備等の事前学習，授業内容に基づくミニ・レポート等を課すので積極的に取り組んでもらいたい。

評価方法

情報処理モデルや知識表象，学習と発達に関する理論等の基本的知識については，小テストやミニ・レポートによって評価する（30%）。また，学習指導・支援の分析については，授業時の発表や討論，ミニ・レポートにより評価する（30%）。学習支援のための指導や学習環境デザインについては，期末レポートによって評価する（40%）。

テキスト

テキストは使用せず，資料を配付する。また参考になる図書については授業中に適宜紹介する。

授業概要

発達障害児の行動特性を理解するための理論や、原因となる問題を特定するためのアセスメントについて代表的なものを中心に講義する。また、アセスメント結果を用いて、発達障害児に対応する方法を示しながら、理論と実践を結びつけた支援のあり方について講義する。

授業計画

第1回	オリエンテーション 本講義の目的と進め方、本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標との関わりを講義する。
第2回	発達障害の現状と各種障害の定義
第3回	発達障害の理論とアセスメントの意義
第4回	LDの種類と認知特性に関する理論
第5回	LDの認知的な偏りをとらえるためのアセスメント
第6回	LD児の事例と指導プログラム
第7回	ADHD児の行動特性を説明する理論
第8回	ADHDの行動特性をとらえる質問紙と原因特定のための検査
第9回	ADHDの理論に基づく対応の事例
第10回	自閉スペクトラム症児の特徴とその症状を説明する理論
第11回	自閉スペクトラム症の症状理解のためのアセスメント
第12回	自閉スペクトラム症児の事例と指導プログラム
第13回	LD児の理論とアセスメントに関する研究論文講読
第14回	ADHD児の理論とアセスメントに関する研究論文講読
第15回	自閉スペクトラム症児の理論とアセスメントに関する研究論文講読

到達目標

1. 現在の教育における子どもの発達障害の現状について理解する。
2. 発達障害児の行動特性を学び、その行動を理論的に捉える視点を獲得する。
3. 発達障害の原因となる問題をとらえるためのアセスメントについて理解し、対応方法を探る視点を獲得する。

履修上の注意

資料等は事前に読んで、専門用語は調べておくこと。各回、発達障害の現状と本授業内容を関連づけ、各自、その考察をノートにまとめ、次時にその考察を更に探求するといった、知見を基に身近な問題を考察する習慣をつけること。

評価方法

発達障害に関わる諸問題について、理論を踏まえた解決の在り方を、各自が協働してディスカッションできたか、また、レポートを基に、各自の問題意識が深化されたかを評価する。ディスカッション (40%)、レポート (60%) とする。

テキスト

授業時に指示する。

授業概要

「家族」「家庭」をとりまく社会環境は大きく変容している。それに伴い、子どもとその家族メンバーが求める「支援」も多様化し、多岐にわたるようになっていく。本授業ではまず、家族社会学の知見を用い「家族」をとらえる視点を鍛えていく。さらに、人口構造、労働市場、経済環境、政策動向、社会意識などマクロな観点から「子どもと家庭」の置かれた状況をとらえ、問題を構造的に読み解く力を身につける。そのうえで、個々の家族の事情やニーズといったミクロな視点から問題をとらえなおし検討していく。子どもの成長を担う専門職は、家庭支援者として、個別かつ多様なニーズに応えていく力が求められている。適切な支援について自らが判断できるよう、学術的なアプローチとともに、実践力を養うことを目的とする。

授業計画

到達目標

1. 「家族」に関する最新の理論やアプローチ方法を学ぶ
2. 現代の「家族」が抱えている問題や困難について理解を深める
3. 問題を構造的に読み解く力を身につけ、支援のあり方を多角的に検討する
4. 支援者としての実践力を身につける

第1回	オリエンテーション～ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけと授業のねらい
第2回	家族論へのアプローチ～家族社会学の観点から
第3回	家族論へのアプローチ～ジェンダー学の観点から
第4回	家族機能の変容
第5回	多様化する家族形態
第6回	家族政策の動向
第7回	労働市場と家族のありよう
第8回	前半のまとめとディスカッション
第9回	家族福祉論～さまざまな事情を抱えた家族への支援
第10回	ひとり親家庭と子どもの貧困
第11回	セクシュアル・マイノリティと教育現場
第12回	支援者として 1「ケア」と「労働」の視点から
第13回	支援者として 2「感情労働」の視点から
第14回	家族をエンパワーするために～1 個人報告とディスカッション
第15回	家族をエンパワーするために～2 個人報告とディスカッション

履修上の注意

文献講読や事例研究など、報告や議論に積極的に参加することを求める。自らが「問い」を発し考える、という態度が求められる。

評価方法

授業での報告や議論への参加態度（40%）と期末レポート（60%）で総合的に判断する。

テキスト

最初の授業で受講者と相談のうえ、講読する文献を指示する。必要に応じて資料を配布する。

授業概要

小中学校の教員としての資質・能力を培う視点に立ち、①新学習指導要領の作成の経緯や理念などを理解する、②新学習指導要領が基礎を置く、我が国社会の変化や課題などを理解する、③我が国の家族の変化や子ども像の変化など、新教育課程作成の基礎となった実態や課題などを理解する、④教員として赴任した場合、学校教育担当者としてどのような点に留意し、子どもや保護者、地域社会の信頼を得たらよいかについて省察を進める、⑤公教育としての学校教育が発生し、形成され、直面してきた課題とは何かについて理解し、公教育担当者としての使命を深く考える、ことに力点を置いて講義する。

授業計画

第1回	この授業のねらいと進め方
第2回	新学習指導要領の告示
第3回	新学習指導要領作成の背景
第4回	新学習指導要領の目指す教育課程の構造
第5回	新学習指導要領とキーコンピテンシー (OECD)
第6回	新学習指導要領とカリキュラムマネジメント
第7回	新学習指導要領と社会に開かれた教育課程
第8回	道徳の教科化-「特別の教科 道徳」の導入
第9回	小学校英語の導入
第10回	プログラミング教育の導入
第11回	教育の条件整備 ①チーム学校の理念と法制改革
第12回	教育の条件整備 ②コミュニティスクールの拡大
第13回	教育の条件整備 ③教員の働き方改革
第14回	学校教育の未来像
第15回	公教育の揺れと教育の私事化
第16回	

到達目標

本講義では、新学習指導要領の理解と教育実践への生かし方に焦点を置き、教員として学校に勤務するうえでの基本的な資質の形成を目指す。特に力点の置かれるポイントについての深い理解が進められるよう講義し、「新しい学校づくり」とはどのような方向性を持ったものであるか、また、特にどのような点に留意して教育実践に臨むことが期待されているかを踏まえた実践者としての力量の獲得を目指す。

履修上の注意

本講義では、平成 31 年度からの小学校新学習指導要領の本格実施（中学校は平成 32 年度から、高校は平成 33 年度から）を踏ま授業を進めるので、マスコミ等で報じられる教育関係時事などには関心を抱き、授業の中で十分な情報をもって討議に参加できるよう務めていただきたいと希望します。

評価方法

成績評価は、期末に課せられる小論文により。

テキスト

安彦・児島他編著：よくわかる教育学原論、ミネルバ書房、2018 年

授業概要

OECD 諸国等の保育・教育システムや方法論、日本の多文化保育・教育の現状や課題等を通じて、多様な教育観、教育環境、教育方法について考察するとともに、ドキュメンテーションやカウンセリング等の具体的な実践について学んで行く。多文化共生社会におけるより良い教育環境構築に向けて、「保育者/教師-子ども」に留まらない広い視点で教育を捉えながら、多様なニーズを踏まえたチルドレンファースト実現にむけて、科学的根拠に基づいた講義を行う。

授業計画

到達目標

1. 国・文化・子ども等を各自が再定義するとともに、その多様性を理解する。
2. 各国の福祉・教育政策の現状と問題点を探り、改善点を見出す。
3. 日本の多文化保育・教育の現状と課題を様々なシステムレベルで捉える。
4. 多文化共生社会における教育について各論的な提言ができる。

第1回	オリエンテーション ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけの理解と導入討論(国・文化とは何か、子どもとは誰か)を行う。
第2回	国・文化・保育の定義と多様性
第3回	OECD 諸国における移民と教育問題
第4回	多文化主義を標榜とする国々における児童福祉・教育政策
第5回	社会民主主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第6回	保守主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第7回	家族主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第8回	日本における移民政策の歴史と在日外国人の人口動態
第9回	日本の多文化保育・教育の現状(定量的なデータから)
第10回	日本の多文化保育・教育の現状(定性的なデータから)
第11回	外国籍や外国に繋がる子どもへの保育・教育の事例分析
第12回	多文化保育・教育における保育者・教師の専門性と役割の考察
第13回	行政における多文化保育・教育への取り組み—川口市の事例も取り上げる—
第14回	互恵的教育環境のためのアンチバイアス教育、ESD 教育
第15回	総括討論(多文化共生社会におけるあるべき保育・教育の形、地域にむけた提言)

履修上の注意

授業内でのディスカッション等へは積極的に参加すること。

複数回文献レビューやレポートを課すことがある。

英語による文献・資料のために必要な者は辞書を用意すること。

本学の位置する川口市内では、平成 26 年において 22,958 人も外国籍住民と 563 名もの外国籍児童が存在する。また平成 21 年の調査では認可保育所の 60%以上で外国につながる子どもの利用がみられている。このような特性を踏まえ、地域における実際の教育・保育に有効な、妥当性・信頼性の担保された具体的な考察や提言を行う意識をもつこと。

評価方法

文献レビューやディスカッション、期末レポート等により、多文化共生社会における教育について提言できる力を評価する。文献レビューやディスカッション (40%)、期末レポート (60%)。

特に定めない。適宜授業内で資料を配布するとともに、参考文献・書籍等を紹介する。

授業概要

教育方法及び授業研究に焦点をあて、それを対象とした教育工学的アプローチに関する理論と実践場面の課題を解決するための具体的適用方法について、実践に照らして理解を図る。特に、授業をティーチングのプロセスではなく、学習のプロセスの支援という立場から講義をする。

さらに、インストラクションデザインという視点から、校内授業研修会を手がかりにして、学び続ける教師集団としての協同研究を推進する教師としての力量形成を目指す。

授業計画

学校教育の質を高める上で、不可欠な要素である学校研究を推進するスクールリーダーとして必要な資質や能力を身に付けることを目標とする。

具体的な学校での事例を題材に、学び続ける教師集団として学校研修・研究を推進することについて考究する。PDCAのマネジメントサイクルを生かした、学校の教育課題に応じた学校研究体制の組織、授業改善に機能する授業研究のあり方、学校研究成果把握の方法について理解するとともに、学校研究を推進するスクールリーダーとして必要な実践力を身に付ける。

第1回	なぜ、デザインなのか
第2回	教育システムと、いくつかの学習モデル(1)
第3回	教育システムと、いくつかの学習モデル(2)
第4回	実践能力目標(1)
第5回	実践能力目標(2)
第6回	学習者の特性
第7回	目標・課題・学習活動の分析(1)
第8回	目標・課題・学習活動の分析(2)
第9回	教授事象
第10回	教育システムの設計
第11回	授業の展開
第12回	教育メディアの特性と活用
第13回	学習者の評価
第14回	教授方略
第15回	グループ活動

履修上の注意

各回は討論形式やワークショップ形式で行うので、予習を十分すること。

評価方法

毎回のテーマに関するディスカッションへの参加度(20%)や課題(ミニレポート)(20%)、2回のレポート(各30%)により評価する。

テキスト

ガニエ・ウェイジャー・ゴラス・ケラー著(鈴木克明・岩崎信監訳)(2007)『インストラクショナルデザイン』北大路書房

授業概要

小学校、幼稚園における将来のミドルリーダーとしての資質を培う視点から、小学校国語科の授業を中心に授業を実証的に研究する方法、教師の意思決定・教師の語り（ナラティブ）の構造的特性、教師の成長を促す組織的要因について講義する。具体的には、(1)教授学習過程を教師と学習者の相互作用として捉え、教材内容と学習課題、学習活動の設定、教師の発問系列・構成と教授方略などを視点にその構造を分析する方法の理解、(2)教師の実践過程における認識・思考、意思決定、省察、改善等に見られる教師の専門的知識基盤のあり方の理解、(3)ミドルリーダーとして教育実践研究を行う姿勢の修得を目指す。受講生は、前時に配布された授業実践記録を読み込み、分析レポートを作成し、次時授業においてそれをもとに講義する。

授業計画

到達目標

1. 教授学習過程の構造を分析する方法を理解する
2. 教師の実践過程における専門的知識基盤のあり方を理解する。
3. 自己の教育実践を対象化して、記述できる力量を形成する。
4. 教育実践に対する自己の姿勢について提言する。

第1回	オリエンテーション 本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標から理解し、学習の進め方、及び受講者に求められる心構えについて
第2回	教育実践研究の目的と意義－教育実践研究とは何か。教育の方法と技術の捉え方
第3回	教授学習過程における相互作用の分析 (1)－授業記録の意味
第4回	教授学習過程における相互作用の分析 (2)－授業記録の量的分析
第5回	教授学習過程における相互作用の分析 (3)－授業記録の質的分析
第6回	教授学習過程における相互作用の分析 (4)－情報処理アプローチの視点から、学習者の文章読解過程、問題解決過程の考察
第7回	教授学習過程における相互作用の分析 (5)－社会文化的アプローチの視点から、学習活動における学習者の学びの考察
第8回	教授学習過程における相互作用の分析 (6)－メタ認知の活性化を促す学習活動の考察
第9回	教師の成長と授業 (1)－教師の専門的知識の考察
第10回	教師の成長と授業 (2)－初任教員と熟達教員の意思決定過程の比較
第11回	教師の成長と授業 (3)－初任教員と熟達教員の単元設計過程の比較
第12回	教師の成長と授業 (4)－子どもが「見える」ことと教師の「言葉がけ」の考察
第13回	教師の成長と授業 (5)－実践者のナラティブの意味
第14回	教師の成長と授業 (6)－教師の成長を促す組織的要因。教育実践研究における倫理の問題
第15回	まとめ－教育実践研究を行う姿勢をまとめ発表する。

履修上の注意

事前に配布された教育実践記録を読み込み、その分析結果をまとめて授業に臨む。作成した分析結果を授業の中でプレゼンテーションできるように用意する。受講生は、文献講読、データ処理や分析方法等の質問や疑問について、オフィスアワー及びメール等で適宜質問して指導を受け、理解の深化を図る。また、各回、教育実践と本授業内容を関連づけ、各自、その考察をノートにまとめ、次時にその考察を探究させるといった、知見を基に教育授業を省察する習慣をつけること。

評価方法

積極的な受講姿勢と実践記録の分析レポート (50%)、また、最終回で、それまでの学びをもとに、これからの教育実践改善への取り組み方についての発表 (50%) により評価する。

テキスト

小学校学習指導要領・幼稚園教育要領。他の必要な文献は、講義の中で適宜指示する。

参考文献：・高久清吉「教育実践学」教育出版 ・平山満義（編著）「質的研究法による授業研究」北大路書房 ・三宮真智子（編著）「メタ認知」北大路書房 ・浅田匡、生田孝至、藤岡完治（編著）「成長する教師」金子書房

授業概要

幼稚園・小学校をベースにしたカリキュラム開発の意義を理解し、先進校の分析や開発した内容・方法に関する議論を通して、カリキュラムの開発・実施について、また、総合的な学習や特別活動と教科の関連を講義する。特に、同学年内の教科、総合的な学習、特別活動等の関係性（水平軸）と幼小の連携や学年間の関係性（縦軸）について事例をもとに考察を行う。そこで得られた知見をふまえて実際の教育現場のカリキュラムを検討する。また、自らがカリキュラムを作成し、評価法やカリキュラムマネジメントのありかたを検討する。

授業計画

到達目標

1. 幼稚園、小学校におけるカリキュラム編成の原理とその評価法が理解できる。
2. 幼小連携カリキュラム開発の理論と方法についての理解ができる。
3. 幼稚園、小学校の年間カリキュラムを作成し、評価法やカリキュラムマネジメントを検討することができる。

第1回	授業の趣旨・進め方について理解する。「カリキュラム開発の歴史」について概要を知る。教育実践におけるカリキュラム開発の意味を理解する。
第2回	「日本の学校の教育目標と教育課程」および「教育内容の組織化と学力」について講義した後、「学力形成および人格形成」のあり方について討論する。
第3回	「教育課程における個性の位置づけ」について講義した後、「個性」と「集団」の在り方とその方法について討論する。
第4回	「問題解決型の学習」について講義した後、「問題解決」に関する討論する。
第5回	「潜在的カリキュラム」について講義した後、その意義と問題点について討論する。
第6回	「幼小の連携」について講義した後、その意義と課題について討論する。
第7回	「学習のユニバーサルデザイン」について講義した後、「特別支援と教育課程」の関連とその具体的手法について討論する。
第8回	「教育課程の評価およびカリキュラムマネジメント」について講義した後、「評価」の在り方と方法について討論する。
第9回	カリキュラム開発先進校の分析の発表および討議①－開発過程の分析－
第10回	カリキュラム開発先進校の分析の発表および討議②－校内研究における討議の分析－
第11回	カリキュラム開発先進校の分析の発表および討議③－教育実践とカリキュラムとの関係分析－
第12回	カリキュラム開発先進校の分析の発表および討議④－PDCA サイクル－
第13回	開発カリキュラムの提案書の作成
第14回	開発カリキュラムの提案書の発表と討議
第15回	開発カリキュラムの発表および討議、振り返り

履修上の注意

本講義では、講義や各自の追求成果に対する議論から学ぶことを目的としている。そのため積極的に授業に参加することが求められる。また、知見を基に教育実践上の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

評価方法

授業記録の提出物・研究協議後の省察レポート（50%）、追究活動での発言や成果発表等のパフォーマンス（50%）で評価する。

テキスト

教科書は特に用いない。資料は必要に応じて配布する。

授業概要

本授業では、教育メディアの一つである映像メディアに着目し、その教育効果と問題点について体験的に学習するよう指導する。まず、教育メディアに関する基礎的な知識を習得するよう講義する。そして、実際に公共に放送されている教育番組や、インターネット上に配信されている動画コンテンツを事例として検証し、その効果と問題点を理解するよう講義する。次に、教育メディアを保育や授業に導入するために必要な技法を習得するよう指導する。続いて、教育メディアの効果を分析し、議論を通じて理解を深めるよう講義する。最後に、映像コンテンツのオープン化、ソーシャル・ネットワークとの関わり、ビデオゲームとの関わりなど、教育メディアに関わる社会的問題について議論を促し、理解が深まるよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 教育メディアを理解するための基礎的な知識を習得し、説明することができる。
2. 教育メディアによる教育効果を理解し、保育・授業へ取り入れることができる。
3. 教育メディアによる教育効果について、データを基に客観的に述べるができる。
4. 教育メディアに関わる社会的な問題を理解し、議論をすることができる。

第1回	オリエンテーション ミドルリーダーとしての力量と本授業の目的と進め方
第2回	教育メディアの基礎 (1) 分類と定義
第3回	教育メディアの基礎 (2) 人間の情報処理モデル
第4回	教育メディアの基礎 (3) 映像メディアと学習
第5回	教育メディアの事例 (1) 教育番組の事例
第6回	教育メディアの事例 (2) 動画コンテンツの事例
第7回	教育メディアの技法 (1) コンテンツ設計
第8回	教育メディアの技法 (2) コンテンツ制作
第9回	教育メディアの技法 (3) コンテンツ配信
第10回	教育メディアの効果 (1) 質問紙調査による評価
第11回	教育メディアの効果 (2) インタビューによる評価
第12回	教育メディアの効果 (3) プレゼンテーション
第13回	教育メディアに関わる社会的問題
第14回	ディスカッション
第15回	まとめ

履修上の注意

授業では、ノート型PCもしくはタブレットやスマートフォンなど、インターネットに接続可能なモバイル情報端末を使用する。また、知見を基に教育実践上の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

評価方法

- 小課題 (40%) 予習課題や復習課題の遂行について評価する。
 レポート (60%) 文献やデータをもとにした論理的かつ客観的な記述について評価する。

テキスト

テキストは特に指定しない。参考文献は適宜紹介する。

授業概要

幼稚園児（以下、園児）及び小学校児童（以下、児童）との「言葉」に関する実態を捉え、『幼稚園教育要領』（以下、『教育要領』）の「言葉」と『小学校学習指導要領』（以下、『指導要領』）との連携における課題とその対策について講義する。とりわけ、小1プロブレムと言われる児童の実態と課題、そして解決に向けて「言葉」という観点から講義する。

授業計画

到達目標

1. 幼児教育から児童教育にかけての言語発達を捉え、幼稚園・小学校で言葉についての指導を研究できる。
2. 幼稚園における保育内容・言葉の領域と小学校国語科における言語活動創出の方法を研究し指導計画を立てることができる。

第1回	オリエンテーション 本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標からの理解。及び、言葉に関する様々な文献・資料の紹介と解説。
第2回	日常生活における園児と児童の話し言葉に関する実態と課題
第3回	『教育要領』の歴史の変遷
第4回	『教育要領』「言葉」の内容と課題 ①
第5回	『教育要領』「言葉」の内容と課題 ②
第6回	園児の話し言葉と児童の話し聞く・書く・読む言葉との関連と実態と課題
第7回	『指導要領』の歴史の変遷
第8回	A「話すこと・聞くこと」領域の内容と課題①—幼児期から小学校低学年—
第9回	A「話すこと・聞くこと」領域の内容と課題②—小学校中学年・高学年—
第10回	B「書くこと」領域の内容と課題
第11回	C「読むこと」（文学的文章）領域の内容と課題
第12回	C「読むこと」（説明的文章）領域の内容と課題
第13回	小1プロブレムの実態と課題
第14回	小1プロブレムの対策と解決
第15回	園児と児童の「言葉」に関する有機的関連の在り方
第16回	定期試験

履修上の注意

参考書、参考資料を事前に読み、子どもの言葉に対する関心を深めて授業に臨むこと。
また、授業で得た知見を基に教育実践上の言葉の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

評価方法

学生に対する評価

- ・定期試験 50%、随時行う授業ごとのレポート 50%

テキスト

テキスト：『保育内容・言葉 改訂版』日名子太郎監修 学芸図書
幼稚園教育要領 文部科学省，小学校学習指導要領解説国語編 文部科学省

参考書・参考資料等

- 岡本夏木『こどもとことば』 岩波新書
- 岡本夏木『ことばと発達』 岩波新書
- 内田伸子『子どもの文章：書くこと考えること』 東京大学出版会

授業概要

幼年期、児童期における数・図形概念の芽生え、発達、特徴について、実践例を交えながら理解できるよう講義する。特に、小学校の算数科授業において、子どもの創造性を伸ばすための山登り式学習法及び課題の解決場面において、多様に思考し新たなアイデアを生み出す発散的思考の活性化法について、その意義も含めて分かりやすく講義する。

授業計画

到達目標

1. 幼児教育から児童教育にかけての数・図形概念の発達を捉え、幼稚園で数や図形概念の芽生えの表れを捉える目とそれを伸ばす指導法を設計できる。
2. 幼児期から小学校及び小学校の発達段階を考慮し、創造的思考を活性化する算数科の授業計画を立てることができる。

第1回	ミドルリーダーとしての力量を到達目標から理解し、授業方法についてのガイダンスを行う。
第2回	子どもの認知構造と数概念の理解
第3回	子どもの認知構造と図形概念の理解
第4回	数概念の発達段階とその特徴
第5回	図形概念の発達段階とその特徴
第6回	子どもの認知構造と熟達者の認知構造
第7回	創造性の構造
第8回	創造的思考を活性化する山登り式学習法
第9回	山登り式学習法の実践例と効果
第10回	発散的思考を活性化する数分野の教材開発
第11回	発散的思考を活性化する図形分野の教材開発
第12回	創造的態度を育てる指導方法
第13回	創造性の評価方法
第14回	子どもの数概念を育てる指導計画の実際
第15回	子どもの図形概念を育てる指導計画の実際

履修上の注意

- ・授業は理解を深めるために講義の他に演習を行う。
- ・教材の開発、指導計画の作成等は、時間がかかるので授業時間以外の学習が必要である。

評価方法

授業への取り組み姿勢 (30%)、課題報告 (30%)、授業後に課すレポート (40%) によって評価する。

テキスト

- ・文部科学省、『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館
- ・文部科学省、『小学校学習指導要領解説総則編』、東洋館
- ・齋藤昇編、『「山登り式学習法」入門』、明治図書
- ・適宜資料を配付する。

授業概要

小学校の理科の学習で扱う自然の事物・現象に関して、子どもの素朴概念や科学的概念・自然認識を探る手法を修得することを目標とする。どのような教材、指導方法、指導過程が子どもの科学認識を揺さぶり、教育効果が期待できるのか等について先行研究の文献を基に考え、小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」および「B生命・地球」の双方において指導計画を立てて模擬授業を行うことができるようにする。

授業計画

到達目標

- ・子どもがもつ素朴概念と科学的概念を探る研究手法を獲得することができる。
- ・科学的概念・自然認識を揺さぶり、意欲を伸ばす指導法を考えることができる。
- ・実感を伴った理解を導く理科授業の創出方法を研究し、指導計画を立て実践することができる。
- ・理科教育、科学教育に関わる文献や論文の検索の方法を習得し、論文を収集できる。

第1回	オリエンテーション 子どもが持つ素朴概念や科学的概念・自然認識とは何か理解する。
第2回	理科教育、科学教育に関わる文献検索の方法を習得し、科学的概念の形成や授業研究に係わる文献情報を収集する。
第3回	科学的概念の形成以前にもつ子どもの素朴概念とはどのようなものか、文献情報や討論を通じて把握する。
第4回	子どもの素朴概念が修正され、科学的概念が形成されることを、小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」における授業実践事例を通して理解する。
第5回	子どもの素朴概念が修正され、科学的概念が形成されることを、小学校理科内容区分「B生命・地球」における授業実践事例を通して理解する。
第6回	科学的概念や自然認識を揺さぶる授業の「導入」部分の指導計画を作成する。
第7回	科学的概念や自然認識を揺さぶる小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」の授業での「実験・観察、ものづくり」部分の指導計画を作成する。
第8回	科学的概念や自然認識を揺さぶる小学校理科内容区分「B生命・地球」の授業での「実験・観察、体験活動」部分の指導計画を作成する。
第9回	科学的概念や自然認識を揺さぶる授業の「まとめ」部分の指導計画を作成する。
第10回	各自が作成した小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」の指導計画に対して討論・批判的検討から得た情報を基に修正をする。
第11回	各自が作成した小学校理科内容区分「B生命・地球」の指導計画に対して討論・批判的検討から得た情報を基に修正をする。
第12回	小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」における模擬授業を実施する。そして、授業における教授行動、教材開発、その他全般について自己評価するとともに、討論・批判的検討から得た情報を基に指導計画を修正する。
第13回	小学校理科内容区分「B生命・地球」における模擬授業を実施する。そして、授業における教授行動、教材開発、その他全般について自己評価するとともに、討論・批判的検討から得た情報を基に指導計画を修正する。
第14回	修正された指導計画について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して指導計画の改善版を完成させる。
第15回	まとめ 本授業での取り組みを振り返り、今後の授業実践への展望を考える。

履修上の注意

保育・教育者としての役割・ねらいをもってグループ活動に積極的に参加すること。また、各自の指導計画について、内容をまとめてプレゼンテーションを行うため、パワーポイント等のプレゼンテーションソフトの使用に慣れておくこと。

評価方法

授業でのグループ討論発表に対する取り組み、模擬授業前に作成した指導計画の内容、模擬授業、模擬授業後に改善した指導計画の内容による総合点で評価する。

テキスト

授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布する。

授業概要

幼児期から児童期の造形表現の発達と教育、理論と実践を往還させながら、幼稚園及び小学校図画工作科における教育実践理論を講義する。幼小の連続性を重視した造形カリキュラムの研究、鑑賞教育と地域社会との連携、諸外国の造形教育について多面的に考察する。学校・家庭・地域社会など様々な芸術教育のあり方について深く学ぶとともに、芸術の教育者として幅広い見識と応用力を身に付けることをねらいとして講義する。

受講生は自ら研究テーマを設定、子どもたちが意欲的な創造活動が展開できる指導法についてグループ討議・発表する。教育現場における課題を析出して、造形表現を中心に実践と理論を結びつけながら考察、授業研究を進める力量を修得できることを目標にする。

授業計画

到達目標

1. 幼児期から児童期の表現の発達を捉え、個に対応した造形活動の指導法について理解する。
2. 造形教育のあり方について深く学ぶとともに、教育現場における芸術活動の指導計画を立てる。
3. 子どもの様々な表現方法についての研究や考察を理論と結びつけ、自らの教育実践・発表に応用する。

第1回	オリエンテーション-教師の力量と、子どもの造形表現における「気づき」と「見立て」の援助のあり方の関係について理解するー
第2回	幼稚園教育と小学校教育の「造形遊び」学習の指導、授業研究、先行研究、国際的な比較研究など事例を基に支援のあり方について考察する。
第3回	身近にある自然物や材料、その形や色の特徴などから自分のイメージをもつ造形活動の題材の設定、導入について考察する。
第4回	感じ取ったことを話す、聞く、話し合うなどの活動を通して、表し方の変化や特徴などをとらえる学習活動と対話型鑑賞教育について考察する。
第5回	幼稚園や小学校、子どものいる施設等での参加型フィールドワークの現状や、表現活動の家庭・地域との連携、共同で行う創造活動について考察する。
第6回	諸外国に見られる親しみのある造形表現と子どもの創造性を伸ばす教授支援のあり方を考察する。(アジア・南米・オセアニア・西欧の造形教育など)
第7回	我が国や諸外国の自然や地域の人々の生活に結びつきながら継承された伝統的な造形の教材化と教育的意義について考察する。
第8回	図画工作科の領域の内容と構成、学習環境とその運営、評価活動のあり方や方法を理解する。
第9回	「絵で表す」学習指導と「立体で表す」学習指導の授業の構成、展開、評価について理解する。
第10回	題材開発にかかわる指導計画や指導案の導入と展開について理解を深める。安全配慮、環境構成の授業のあり方を学び、学習指導案を作成する。
第11回	感性と表現に関する領域「表現」と小学校図画工作の接続、小学校他教科との関連について考察する。
第12回	造形表現の単元設定を行い、学習指導案を作成する。作成した学習指導案に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。
第13回	図画工作科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。作成した学習指導案に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。
第14回	作成した単元設定に基づき、幼児観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議、検討する。
第15回	作成した単元設定に基づき、児童観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議と相互評価を行う。

※学外授業として幼児児童の作品展鑑賞会又は美術館鑑賞教育を行うことも予定される。

履修上の注意

教育者としての役割・環境・ねらいを具体的に定め、グループ活動に積極的に参加すること。また、授業内で視聴した映像・子どもの造形作品についてのミニレポートに取り組むこと。

評価方法

授業におけるグループ討議の内容(40%)とレポート(60%)で評価。

テキスト

授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布。

授業概要

本授業を通して、現代社会の基本理念である人間尊重の精神、個人の尊厳などについて、幼児期から理解を深められる道徳教育を考察する。そのため、本授業においては、道徳教育を①社会との関連、②人間尊重の精神、③子どもの発達段階における認識、④授業の創出の4つの観点から講義を行い、それぞれのテーマの理解を深める。

授業計画

到達目標

1. 社会の変動、価値観の推移の中にあって、価値観とは何かを自ら探究できるようになる。
2. 現代社会の理念である人間尊重の精神の理解を深め、道徳指導の基本原則となるようにする。
3. 幼児期から青年期までの道徳観の発達を捉え、発達相応の道徳教育を探究できるようになる。
4. 幼稚園・小学校における道徳教育について常に工夫し、指導計画を立てられるようになる。

第1回	本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標から理解し、現代社会が期待する道徳とは何か（社会に生きる子どもの規範）を探求する
第2回	社会科と道徳教育：社会を認識し、社会通念を理解し、価値判断を行う
第3回	社会変化に伴う価値観の変化と道徳①：教育勅語、修身科を探求する
第4回	社会変化に伴う価値観の変化と道徳②：伝統と文化、歴史観を探求する
第5回	人権教育と道徳教育①：人権教育の類型
第6回	人権教育と道徳教育②：部落差別に対峙する
第7回	人権教育と道徳教育③：外国人差別に対峙する
第8回	宗教教育と道徳教育：宗教的価値観と国民道徳の相克
第9回	子どもの発達と道徳①：幼・小・中、学校段階に応じた道徳とは何か
第10回	子どもの発達と道徳②：コールバーグ理論を探求する
第11回	子どもの発達と道徳③：コールバーグ理論を使った道徳教育の実践
第12回	幼稚園における道徳教育：良いこと悪いこと、みんなが守ること
第13回	小学校における「道徳教育の内容」①：発達に伴う内容の深化
第14回	小学校における「道徳教育の内容」②：個人から社会へ
第15回	全体のまとめとしての討論：これまでの実践経験を理論化してみる

履修上の注意

授業は毎回関連しているので、欠席しないこと。また機会を見つけて授業見学に赴くことがあるので、参加すること。なお、道徳教育の基本となる学習指導要領の道徳領域に関しては、学部段階で身につけているものとして講義する。また、授業で得た知見を基に教育実践上の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

評価方法

4つの観点ごとに課すレポート及び最終回に提出する研究レポートによって評価する。観点別のレポート（40%）、最終レポート（60%）で評価。

テキスト

授業テーマは多岐にわたるので、プリントを用意します。各回で紹介した参考文献については、積極的に目を通しておくこと。

授業概要

授業を教師と学習者の相互作用としての教授学習過程として捉え、小学校における将来のミドルリーダーとしての資質を培う視点から、授業実践記録（逐語文字記録・映像記録等）をもとに、教授学習過程を教材内容と学習課題、学習活動の設定、教師の発問系列・構成等から分析し、教師としての授業分析力を高め、「わかる」授業を実現できる力量を修得する。本授業は、研究者教員及び教育実践に精通した実務家教員が共同で授業を進める。研究者教員による理論的分析と実務家教員による臨床的視点からの分析を通して、受講者・実務科教員・研究者教員で議論し、単元計画作成、授業省察を行う。

授業計画

到達目標

1. 教室での教授行動と児童の学習過程を理論と実践を往還しながら授業を分析できる。
2. 自らの研究目的に適した授業分析方法の選択、開発を行うことができる。

第1回	オリエンテーション 理論と実践の往還による「わかる」授業を設計について講義し、これからの学習計画と受講者の心構えを理解する。
第2回	学習指導要領における新しい学力観の捉え方（思考力・表現力）と各教科における言語活動との関係について考察する。
第3回	授業記録をもとに、授業は教師と学習者が相互に学びあう過程として捉え、学び合いの効果と教授行動を分析し、シミュレーションを通してし合う。
第4回	授業記録をもとに、学習過程が学習成果に及ぼす影響や、学習の質を学力・意欲の関係から分析し、シミュレーションを通して評価し合う。
第5回	授業記録をもとに、問題解決学習における児童の認知と情意を分析し、問題解決を促す支援のあり方について考察する。
第6回	授業記録をもとに、協同学習過程の効果を高める要因について分析し、協同学習過程における教授支援のあり方を考察する。
第7回	教室内言語の観点から授業を分析し、伝え合う力の育成と人間力育成の関係についてロールプレーを取り入れ考察する。
第8回	授業記録をもとに、学習者に学習をモニタリングする手がかりとなる評価活動のあり方や方法を考察する。
第9回	国語科の単元設計を行う。学年の発達段階を考え、「わかる授業」をめざし、児童の学習活動とそこでの学びをシミュレーションしながら作成する。
第10回	作成した国語科の単元設計に基づき、授業を実施し、評価する。
第11回	算数科の単元設計を行う。学年の発達段階を考え、「わかる授業」をめざし、児童の学習活動とそこでの学びをシミュレーションしながら作成する。
第12回	作成した算数科の単元設計に基づき、授業を実施し、評価する。
第13回	「総合的な学習の時間」の単元設計を行う。育てようとする資質や能力及び態度を明確にし、児童の学習をシミュレーションしながら作成する。
第14回	作成した「総合的な学習の時間」の単元設計に基づき、再度シミュレーションを行い単元構成の妥当性、地域との連携、教材の開発などを検討する。
第15回	まとめ 授業実践について自らの力量を評価し、今後の課題を捉える。

履修上の注意

教師としての態度を意識し、授業に臨むこと。各回、授業内容をもとに自らの教育実践力量を省察し、その省察を記録し、次時に教育実践力量を更に深化させるといった、教育実践力量を省察する視点の獲得と省察の習慣をつけること。

評価方法

授業分析における積極的姿勢（40%）と模擬授業などによる自己評価における省察の深まり（60%）で評価する。

テキスト

適宜授業において配布する。

授業概要

本演習の目的は、幼稚園教育における教育成果を高める保育・教育の要件とその評価法を開発できる力を養成することである。理論的観点のみならず実践的臨床的観点から保育・教育の問題を考察していく。そのための資料として保育場面で収集された子ども同士や保育者と子どもとのやりとりのエピソード、あるいは保育者による保育・教育実践に関するナラティブ（語り）などを用いる。さらに演習から学んだ知識を実践知として深めていくために模擬保育を行う。本授業は、研究者教員と幼稚園教育に精通した実務家教員が共同で進めていく。

授業計画

到達目標

1. 事例や資料を検討することで幼稚園での教育成果を高める方法を考えること
2. 事例や資料を検討することで問題解決への的確な提案が出来ること
3. 模擬授業によって実践知を深めること

第1回	オリエンテーション：講義科目での学びの振り返りと、本演習の目的と方法の説明、院生各自の問題意識の確認
第2回	幼稚園教育の現代的問題を探る：問題探究の視点と方法
第3回	幼稚園教育における理論と実践を考える（1）子どもの遊びエピソードの分析
第4回	幼稚園教育における理論と実践を考える（2）子どもの遊びエピソードの分析
第5回	幼稚園教育における理論と実践を考える（3）子どもの遊びエピソードの分析
第6回	幼稚園教育における理論と実践を考える（4）保育者と子どもの愛着関係
第7回	幼稚園教育における理論と実践を考える（5）保育者同士の関係性
第8回	幼稚園教育における理論と実践を考える（6）保育者と保護者の関係性
第9回	幼稚園教育における臨床的問題を考える（1）子どもの個性の育ちと対応
第10回	幼稚園教育における臨床的問題を考える（2）子どもの食と健康
第11回	幼稚園教育における臨床的問題を考える（3）保育環境と生活
第12回	幼稚園教育における臨床的問題を考える（4）保育者の資質向上
第13回	模擬保育（1）エピソード分析・ナラティブ分析の応用としての実践及び評価
第14回	模擬保育（2）臨床的問題への応用としての実践及び評価
第15回	まとめ：教育成果を高める方法と評価法の開発に向けて

※受講者の興味関心や進度に応じて一部変更を行う場合があります。

履修上の注意

さまざまな事例や資料に対して、理論面や実践面から考察し、自分の意見をもって積極的に発言することで、専門性を高める努力をしてほしい。各回、自らの教育実践力について省察し、次の回ではさらにその省察を深めるなど、教育実践を含む自己の省察・洞察する習慣を身につけること。

評価方法

演習中の発言や積極的参加態度（40%）、模擬授業などによる自己評価における省察の深まり（60%）で評価。

テキスト

適宜プリントや資料を配布する。必要な文献は適宜指示する。

【参考資料】学習指導要領・幼稚園教育要領

授業概要

小学校の各教科の学習への基礎を培う幼稚園教育と小学校各教科における学習活動を高める教材開発・環境開発の方法について学ぶ。特に学習者の思考を高めることをねらいとした教材開発を受講者各自が行い、模擬授業を通して教材の教育効果の検証や実践的な理解を深める。本授業は、幼児期から児童期の子どもの発達を縦の流れとし、各教科を科目横断的に捉え、理論と実践を往還しながら複数教員による指導を行う。また、環境教育と体験学習、造形教育と教材製作を中心に、指導計画の立案と実施、評価などを行う。

授業計画

到達目標

1. 幼児期から児童期の発達を捉え、学習への基礎を培う教材開発と環境開発の方法を修得することができる。また、学習活動を高める教材開発に必要な科学的概念を修得することができる。
2. 小学校教員としての教材づくり、指導計画の立案と実施、評価を行うことができる。
3. 事例を用いて教材の効果を分析・考察する手法を身につけ、研究や考察を理論と結びつけて自らの教育実践・発表に応用することができる。

第1回	オリエンテーション 講義科目での学修の振り返りと、教材・環境開発を行う上でのこれからの学習計画、受講生の心構えを理解する。
第2回	小学校各教科と幼稚園教育の目標と内容、5つの領域（健康、人間関係、言葉、環境、表現）編成とそのねらいと教材・環境の関わりを理解する。
第3回	幼児教育とその後の階梯である小学校教育の教科指導について学ぶ。主として幼児教育に関わる保育内容と環境と指導法について考察する。
第4回	幼児教育に関わる教材開発や授業研究等、先行研究、国際的な比較研究など事例を基に支援のあり方について考察する。
第5回	幼稚園や子どものいる施設等での長期の観察・参加型フィールドワークの現状や分析活動など、保育・教育現場における教材開発の実際について考察する。
第6回	グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動のあり方や方法を議論する。
第7回	小学校学習指導要領の「総合的な学習の時間」における問題の解決能力と主体的な探究活動について、教材開発の事例をもとに議論する。
第8回	「総合的な学習の時間」の横断的・総合的な学習を展開するための理論と教材開発の具体的な方法、環境設定や環境配備等について議論する。
第9回	開発題材にかかわる指導計画や指導案の導入と展開について理解を深める。安全配慮、環境教育の授業のあり方を学び、学習指導案を作成する。
第10回	自然や身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」と小学校理科の関連について理解する。理科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。
第11回	作成した理科の単元設定に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。評価活動のあり方や方法について学ぶ。
第12回	感性と表現に関する領域「表現」と小学校図画工作の関連について理解する。図画工作科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。
第13回	作成した図画工作科の単元設定に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。評価活動のあり方や方法について考察する。
第14回	児童観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議、検討する。
第15回	地域との連携、教材開発の今後の展望について討議、発表のまとめを行う。

※学外授業として、博物館又は美術館鑑賞教育を行うことも予定される。

履修上の注意

保育・教育者としての役割・環境・ねらいを具体的に定め、グループ活動に積極的に参加すること。自己のグループ活動におけるコミュニケーション力量を省察し、その省察を記録し、次時に生かすこと。

評価方法

授業における教材開発の内容とレポート（50%）、発表会（50%）で評価する。

テキスト

授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布する。

授業概要

現在、学校で起きているいじめや自殺、不登校について、理論と実践の両面から学ぶ。いじめなどの人権問題、自殺や不登校の対応を海外も参考にしながら探求する。また、いじめや自殺を防ぐための模擬授業体験や、ロールプレイによりカウンセリングをするなども取り入れ、理論と実践の往還による専門知識の獲得を目指すように指導する。本授業は、心理学と教育学を専門とする 2 名の教員により、各テーマについて複数の視点から分析・考察できるようにする。

授業計画

到達目標

1. 幼稚園や小学校からいじめをなくすため、人権や情念について理論的に学び、指導法の立案と実施、評価法を研究することができる。
2. 小学校におけるいじめを早期に発見し、対処するための学級経営の実施と評価法を研究することができる。
3. 小学校における自殺・不登校対策を研究することができる。

第1回	オリエンテーション 本演習の目的と方法、及び、受講生の心構えを理解する。
第2回	いじめ・自殺・不登校についての理論
第3回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読 (1) 人権といじめ
第4回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読 (2) 人権といじめ・不登校
第5回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読 (3) 情念と自殺
第6回	受講生による問題意識の提示
第7回	受講生による問題意識の発表と明確化
第8回	受講生による問題意識の探求と発表
第9回	ロールプレイング (1) カウンセリング体験
第10回	ロールプレイング (2) カウンセラー体験後の考察
第11回	問題行動に対する授業と教材 (1) 授業方法について
第12回	問題行動に対する授業と教材 (2) 教材の検討
第13回	問題行動に対する授業と教材 (3) 模擬授業体験 理論と実践の統合
第14回	問題行動に対する授業と教材 (4) 模擬授業の考察
第15回	全体のまとめ

履修上の注意

講読した文献ごとに要約し、再考する。

ロールプレイやグループ活動における自己のコミュニケーション力量を省察し、その省察を記録し、次時に生かすこと。

評価方法

各回のまとめ、模擬授業、レポート内容から、理論と実践の往還により各自の問題意識が深化されたかにより評価する。各回のまとめ (30%)、模擬授業 (30%)、レポート内容 (40%)。

テキスト

授業時に指示する。

授業概要

学校・行政・NPO等の地域における子育て支援・保育・教育等への取組みについて、事例検討や見学を通じて、地域連携プロジェクトへむけた具体的な方法論と課題を学んで行く。また子育て支援、幼保小連携、特別なニーズを持った子どもへの保育・教育等について、地域連携プロジェクトを立案・実施・評価する演習を通じて、社会全体で子どもを保育・教育することにむけた専門性を涵養する。

本授業は地域連携において必須となる複数の分野にまたがる専門職間の連携等を想定し、専門分野が異なる研究者が共同で行う。このことにより、複数の視点やニーズに基づいたバイアスの除去や分野間のアコモデーションのあり方の実際を学ぶ。

授業計画

到達目標

1. 地域における行政・NPO等の取組みの現状と問題点を知る。
2. 既存のプロジェクトについて、見学・参加し、プロジェクト運営の方法論を知る。
3. プロジェクトを立案・実施・評価するプロセスを通じ、地域連携にむけた教育者としての専門性を養う。
4. 地域のニーズの多様さを知り、複数の分野の専門職が連携することの重要性を理解する。

第1回	保育・教育における地域連携の必要性と課題、及び、受講生の心構えを理解する。
第2回	学校・行政・NPO主体の地域連携プロジェクト事例検討・1(子育てサロン)
第3回	学校・行政・NPO主体の地域連携プロジェクト事例検討・2(幼保少連携)
第4回	学校・行政・NPO主体の地域連携プロジェクト事例検討・3(特別なニーズを持った子どもへの保育・教育)
第5回	学校・行政・NPO等への見学・インタビュー
第6回	学校・行政・NPO等への見学・インタビュー報告レポート
第7回	地域連携プロジェクトのためのテーマ抽出
第8回	地域連携プロジェクト計画演習・1地域における保育・教育ニーズの観点から (教師・保育者としての学校外を含んだ幼児・児童を持つ家庭への支援の視点)
第9回	地域連携プロジェクト計画演習・2先行するプロジェクトの評価の観点から (教師・保育者としての専門性をどう活用しているか、教育的改善にどう繋がったかの視点)
第10回	地域連携プロジェクト計画演習・3プロジェクトの妥当性と成果予測の観点から (目的の明確化や妥当性・信頼性の視点、教育的成果を指導計画等にどう活かしていくかという継続性の視点)
第11回	地域連携プロジェクト企画プレゼンテーション
第12回	地域連携プロジェクト実施・1
第13回	地域連携プロジェクト実施・2
第14回	地域連携プロジェクト事後評価
第15回	地域連携プロジェクトの改善点と今後の課題(学校教育との連携の視点から)

履修上の注意

授業時間外の学外見学等を行うことがある。
 演習科目であることから、主体的かつ積極的に取り組みこと。
 授業内で複数回のレポート、プレゼンテーションを課すことがある。
 プロジェクトとの計画・実施においては常に「教師・保育者」としての視点を持つこと。

評価方法

各演習・実習への取組み(30%)、計画書(30%)・レポート(40%)により評価する。

テキスト

特に定めない。授業内で適宜資料を配布する。

授業概要

各自の授業実践に関する問題意識に基づき、国内外の基礎文献の講読、大学院生同士の議論を踏まえ、問題意識を精緻化し、研究テーマの明確化と研究計画の作成を図る。そして、授業実践研究に関する論文で独創性を発揮できる研究姿勢の基礎を体得した上で、修士論文の性格を自覚した論文執筆の心構えを身につける。

授業計画

到達目標

1. 「問題意識」を精緻化し、「課題意識」と「研究テーマ」を明確にする。
2. 「研究計画」を作成する。
3. 修士論文執筆における独創性を発揮した研究姿勢を体得し、論文執筆の心構えを形成する。

第1回	オリエンテーションー授業実践に関する「問題意識」を発表し合う。
第2回	「問題意識」から「課題意識」へー「問題意識」を研究レベルで捉え直し、「課題意識」を明確化する。参考文献の検索を次回までの課題とする。
第3回	「研究計画」(第1次)の作成と研究ノート作成ー検索した参考文献を検討し、第1次「研究計画」を作成する。また、研究ノートの作成方法を学ぶ。
第4回	研究問題に関連した文献の講読と議論ー検索した参考文献の講読と議論。さらに参考文献を収集することを次回までの課題とする。
第5回	「課題意識」の検討ー「研究計画」(第1次)の「課題意識」をもとに検索した文献を検討し、「課題意識」を検討する。
第6回	教育学理論と教育実践の結合ー取り組む課題が、「ミドルリーダー」の資質を保證する資格であるか検討する。
第7回	「研究計画」(第2次)の作成ー「課題意識」の構成と第6回の授業から第2次「研究計画」を検討する。
第8回	「研究計画」(第3次)の作成ー参考文献を第一・二次情報の選別を検討し、「研究計画」(第3次)の修正を検討する。
第9回	「研究計画」(第4次)の作成ー「課題意識」を議論し、修正を加え、第4次「研究計画」を作成する。
第10回	「研究計画」(第5次)の作成ー「課題意識」の構成を検討し、修正を行い、それに基づく第5次「研究計画」作成する。
第11回	議論と自己課題への省察ー「研究計画」(第5次)と参考文献をもとに、自己の課題への省察を行う。省察を踏まえ、第5次「研究計画」を修正する。
第12回	「研究計画」(第6次)の作成ー自己課題への省察をもとに研究課題を明確にし、第6次「研究計画」を作成する。
第13回	「研究計画」(第7次)の作成ー教育関連学会の研究論文を参照し、教育学研究における修士論文の性格を理解し、第7次「研究計画」を検討する。
第14回	「研究テーマ」と「研究計画」の確定ー「研究計画」(第7次)と「課題意識」からの「論文題目」を検討し、「研究テーマ」と「研究計画」を確定する。
第15回	まとめー教育課題研究Ⅱに向けての整理

履修上の注意

- 各回修了後、研究経過を研究ノートにまとめる。
- 講読した文献ごとに内容をまとめる。
- 修士号請求論文内容には独創性が求められるが、その独創性は、論文執筆者が日常的な「問題意識」を研究レベルの「課題意識」に高め、それに基づく「研究計画」に支えられる。「問題意識」を大事に育み、強く維持し続けること。

評価方法

各回の研究経過のまとめにより、問題意識が深化・明瞭化されたかにより評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

理科教育・環境教育の実践研究や授業研究に関する文献及び教材開発の実践事例を収集し、その内容についての討論・批判的考察を行う。そして、理科教育・環境教育の今日的課題を把握するとともに実践研究の方法を修得し、修士論文の研究テーマの決定、研究計画の作成ができるよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 理科教育・環境教育に係わる文献や実践事例をもとに討論し、批判的に考察することができる。
2. 理科教育・環境教育に係わる実践研究の方法を修得することができる。
3. 修士論文の研究テーマを決定し、研究計画を作成することができる。

第1回	修士論文作成に向けたガイダンスを行い、論文作成の手法を確認する。
第2回	理科教育に係わる研究の歴史と近年の動向を整理する。文献収集の方向性を明確にする。
第3回	環境教育に係わる研究の歴史と近年の動向を整理する。文献収集の方向性を明確にする。
第4回	理科教育・環境教育に対する学生がもつ問題意識を整理する。また、問題解決に係わる情報を収集するための文献検索を行う。
第5回	検索した文献をもとに、学生がもつ問題意識を修士論文で扱う学術的課題として整理する。
第6回	整理された学術的課題について、その基になった自身の問題意識や文献情報を示しながら発表・討論し、研究テーマを検討する。
第7回	各自が考えた研究テーマに対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に研究テーマを再考する。
第8回	各自が再考した研究テーマについて、その基になった自身のもつ課題や文献情報を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに研究テーマを決定する。
第9回	研究テーマに対して、文献に基づく根拠をもった研究目的を示しながら発表・討論し、研究計画を検討する。
第10回	各自が考えた研究計画に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に研究計画を再考する。
第11回	各自が再考した研究計画に対して、再修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得られた情報を基に研究計画の精緻化を図る。
第12回	再修正された研究計画について、文献情報をもとに整理・確認して研究計画を決定する。
第13回	研究テーマ・研究計画及び討論・批判的検討から得られた情報を基に論文題目の原案を作成する。
第14回	各自が考えた論文題目の原案に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に論文題目の原案を決定する。
第15回	論文題目の原案、研究テーマ、研究計画の係わりが適切であるかどうか検討する。討論・批判的検討から得た情報を基にそれぞれを確定する。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

出席と発表内容、討論への参加状況、研究への意欲などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

授業概要

道徳教育及び実際の教育問題について歴史的視野に立って研究できるよう指導するものである。このため修士論文作成においては、歴史研究及び社会調査法に基づいて調査研究を行い、論文執筆に向けていく。修士論文のテーマの確定から対象となる資料についての理解を深め、研究の正しい方法を身につけられるまで指導を行う。

授業計画

到達目標

1. 修士論文のテーマを確定する。
2. 歴史研究、社会調査の基本について整理する。
3. 自己の研究課題にとって適切な研究方法を確定する。
4. 修士論文作成までの研究計画を作成する。

第1回	修士論文作成に向けて：今後の日程などを確認する。
第2回	研究及び論文の執筆とは①：研究方法の分類について整理する。
第3回	研究及び論文の執筆とは②：歴史研究について検討する。
第4回	研究及び論文の執筆とは③：社会学的方法について検討する。
第5回	研究及び論文の執筆とは④：論文執筆で守るべきことについて指導する。
第6回	研究テーマについて①：現在考えているテーマを発表する。
第7回	研究テーマについて②：テーマに関する研究動向について発表する。
第8回	先行研究の分析①：学術論文の研究方法を分析する。
第9回	先行研究の分析②：学術論文の構成を分析する。
第10回	先行研究の分析③：研究資料について考察する。
第11回	自己の主要な研究方法は何か：研究手法を確定する。
第12回	研究計画書の作成①：研究の対象となる資料について検討する。
第13回	研究計画書の作成②：調査方法について確認する。
第14回	研究テーマと実際教育に乖離はないか①：教育現場での見学とヒアリング
第15回	研究テーマと実際教育に乖離はないか②：教育現場見学の報告とテーマ修正

履修上の注意

本担当者は、子どもの社会認識、価値観形成にかかわる分野の研究者である。このことをよく確認の上、修士論文の課題を決定すること。

評価方法

授業の各回で取り上げた研究に関する技法について理解できているか(内容理解)、また、研究テーマの深まりなどを総合的に評価する。

テキスト

斉藤孝『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部
 今井登志喜『歴史学研究法』東京大学出版会
 その他、必要に応じてプリントを配布する。

授業概要

各自の授業実践に関する問題意識に基づき、国内外の基礎文献の講読、大学院生同士の議論を踏まえ、問題意識を精緻化し、研究テーマの明確化と研究計画の作成を図る。とりわけ、教育方法学分野の論文執筆で独創性を発揮できる研究姿勢の基礎を体得した上で、修士論文の特徴を自覚した論文執筆の心構えを身に付けるための研究指導を行う。

授業計画

到達目標

1. 「問題意識」を精緻化し、「課題意識」と「研究テーマ」を明確化する。
2. 「研究計画」を作成する。
3. 論文執筆における独創性を発揮した研究姿勢を体得する。
4. 論文執筆の心構えを形成する。

第1回	オリエンテーション：授業実践に関する「問題意識」を発表し合う。「問題意識」を日常的疑問から研究様式へと整理する。
第2回	「問題意識」から「課題意識」へ：「問題意識」を研究レベルで捉え直し、「課題意識」を明確化する。参考文献の検索を次回までの課題とする。
第3回	「研究計画」(第1次)の作成と研究ノート：検索した参考文献を検討し、第1次「研究計画」を作成する。また、研究ノートの作成方法を学ぶ。
第4回	研究問題に関連した文献の講読と議論：検索した参考文献の講読と議論。さらに参考文献を収集することを次回までの課題とする。参考情報の検索を学ぶ。
第5回	「課題意識」の検討：「研究計画」(第1次)の「課題意識」をもとに検索した文献を検討し、「課題意識」を検討する。
第6回	教育方法学の理論と教育実践の結合：取り組もうとしている課題が、教員の資質・能力を保証あるいは形成すること(ミドルリーダーの育成や教師の成長)に耐えうるものであるか検討する。
第7回	「研究計画」(第2次)の作成：「課題意識」の再構成と第6回の授業から第2次「研究計画」を検討する。
第8回	「研究計画」(第3次)の作成：参考文献を精査し、選別を検討し、かつ追加しながら、「研究計画」(第3次)への修正を検討する。
第9回	「研究計画」(第4次)の作成：「課題意識」を再吟味し、修正を加え、第4次「研究計画」を作成する。
第10回	「研究計画」(第5次)の作成：「課題意識」の構成を理論と実践を往還するという視点から検討し、修正を行い、それに基づく第5次「研究計画」を作成する。
第11回	議論と自己課題への省察：「研究計画」(第5次)と参考文献をもとに、自己の課題への省察を行う。省察を踏まえ、第5次「研究計画」を修正する。
第12回	「研究計画」(第6次)の作成：自己課題への省察をもとに研究課題を明確にし、とりわけ、時系列に即した第6次「研究計画」を作成する。
第13回	「研究計画」(第7次)の作成：教育関連学会の研究論文を参照し、教育学研究における修士論文の性格を理解し、教育の理論と実践をつなげる第7次「研究計画」を検討する。
第14回	「研究テーマ」と「研究計画」の確定：「研究計画」(第7次)と「課題意識」からの「論文題目」を検討し、「研究テーマ」と「研究計画」を確定する。
第15回	まとめ：教育課題研究Ⅱに向けての整理と課題。

履修上の注意

- 各回修了後、研究経過を研究ノートにまとめる。
- 講読した文献ごとに内容をまとめる。
- 修士号請求論文内容には独創性が求められるが、その独創性は、論文執筆者が日常的な「問題意識」を研究レベルの「課題意識」に高め、それに基づく「研究計画」に支えられる。「問題意識」を大事に育み、強く維持し続けること。

評価方法

各回の授業中の議論への参加状況及び研究経過のまとめにより、評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

1 年前期の成果を踏まえ、国内外の文献を輪読と討議を通じて修士論文にむけた研究テーマを明確にする。また各文献の研究手法についての妥当性・信頼性を検討しながら、仮説検証型の研究に耐えうる社会調査法、統計法の基礎的な能力を養い、科学的な根拠が意識された修士論文研究計画を立て得るよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 修士論文にむけた研究テーマを見出す。
2. 質的・量的な社会調査法および統計法を取得する。
3. 修士論文にむけた研究計画を立案する。

第 1 回	関心のあるテーマの発表と、修士論文への妥当性の検討
第 2 回	関心のあるテーマについての文献講読と討議・1 各種データベース利用を基礎から学び、各自が文献を精読し内容を発表・討議することで、「興味関心」を「具体的な研究目的」へと接続させるための基礎となる力を養う。
第 3 回	関心のあるテーマについての文献講読と討議・2
第 4 回	研究テーマの設定 2 回の文献講読によって得られた知見を基に、研究テーマにたいする視点を焦点化し、研究のおおよその概念的な枠組みを得る。
第 5 回	研究の目的および仮説の設定 研究の具体的な目的を明文化し、検証すべき仮説を明らかにしながら、具体的な方法を検討する。
第 6 回	研究テーマに関する先行研究の収集と要約・1 先行研究を収集・要約・検討することで、自身の研究の必要性を再検討するとともに、より妥当性の高い目的・仮説の設定にむけた修整を行う。
第 7 回	研究テーマに関する先行研究の収集と要約・2
第 8 回	先行研究における研究方法の考察・1(社会調査法を中心に) 定量的・定性的調査それぞれにおいて、当該テーマに関わる先行研究の調査法のあり方を精査し、より妥当性・信頼性の高い方法論のあり方を探る。
第 9 回	先行研究における研究方法の考察・2(統計法を中心に) 科学的なエビデンスに基づいた研究を目指し、クロス集計等の基礎を確認するとともに、多変量解析等のより発展的な手法の実際を学ぶ。
第 10 回	研究方法の検討と作業仮説の設定・1 第 9 回までの内容を踏まえ、具体的な調査方法を検討するとともに、仮説検証にむけて積み上げるべき作業仮説と結果の予測を行う。
第 11 回	研究方法の検討と作業仮説の設定・2
第 12 回	研究計画書の作成・1 第 11 回までの内容を踏まえ、詳細な研究方法に加え、調査票等の素案と、結果予測・成果予測までを加えた研究計画を作成する。
第 13 回	研究計画書の作成・2
第 14 回	研究計画書のプレゼンテーションおよび討議 各自の研究計画をプレゼンテーションし、相互の問題点等を洗い出しながら、計画を洗練させることを目指す。
第 15 回	プレ調査と研究スケジュールの検討

履修上の注意

文献講読や討議等について、自分の研究テーマとの関連に関わらず積極的に参加すること。EXCEL, SPSS 等のソフトウェアを使用する。慣れていない場合、操作に習熟する様に努力をすること。個別に指示した参考文献・書籍等については必ず目を通すこと。

評価方法

文献講読、討議内容、研究計画書等から総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。毎週文献・資料を配布する。

授業概要

発達障害の理論、アセスメント、支援のあり方に関する国内外の文献を輪読し、問題意識を高めるとともに、研究テーマを絞り込む。そして、研究テーマに関する基礎文献を踏まえたうえで、研究計画の作成を図り、修士論文に求められる独創的な研究を遂行するための基礎的な力を身につける。

授業計画

到達目標

1. 発達障害に関する問題意識を高め、研究テーマを明確にする。
2. 基礎文献を踏まえた独創的な研究計画を作成する。
3. 修士論文に必要な独創的な研究を遂行するための基礎的な力を形成する。

第1回	オリエンテーション 発達障害研究について理解する
第2回	発達障害に関する問題意識とキーワードの明確化、参考文献の検索を行う
第3回	参考文献の検討および整理の仕方について学ぶ
第4回	文献から文献をたどって、発達障害に関する問題意識をより深化させる
第5回	発達障害に関する問題の整理と研究テーマの明確化を行う
第6回	研究テーマに関する文献の整理と研究方法の検討を行う
第7回	研究計画の作成および研究ノートの作成を行う
第8回	研究計画に関する文献の整理と仮説の検討を行う
第9回	研究計画に関する文献の整理とデータ内容の検討を行う
第10回	研究計画に関する文献の整理と対象者の検討を行う
第11回	研究計画に関する文献の整理とデータ収集方法の検討を行う
第12回	参考文献をもとに、研究計画に関して再検討し、必要に応じて修正する
第13回	発達障害研究における修士論文の位置づけを理解し、研究計画を作成する
第14回	研究テーマと研究計画を確定させる
第15回	まとめ 教育課題研究Ⅱに向けて整理する

履修上の注意

- ・適宜、研究経過を研究ノートにまとめること。
- ・日頃から、テーマとしている問題について、文献を収集し、後で振り返りやすいように整理すること。

評価方法

発達障害への問題意識が明確化されたか、独創性のある研究計画となっているかにより評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育学に関する文献や論文を輪読、討論することを通して、修士論文執筆に向けて各人の課題を明確化する作業を行う。同時に、史料収集の方法など、研究を進めていく上で必要な技術についても指導する。これらの内容に触れた上で、最終的に修士論文の研究計画書が作成できるよう指導する。

授業計画

到達目標

1. 修士論文のテーマを確定させ、研究計画を作成する。
2. 先行研究批判を通して、学術論文における独創性についての考え方を身に付ける。
3. 自らのテーマに合わせた研究技法を身に付ける。

第1回	オリエンテーション：修士論文までの流れ
第2回	先行研究収集の方法
第3回	先行研究批判の方法
第4回	修士論文に関わる先行研究に関する履修者の報告（1）
第5回	修士論文に関わる先行研究に関する履修者の報告（2）
第6回	教育学研究の方法（1）：歴史的研究における史料
第7回	教育学研究の方法（2）：歴史的研究における史料批判
第8回	教育学研究の方法（3）：思想的研究におけるテキストクリティーク
第9回	研究計画の作成方法（1）：問題意識の整理
第10回	研究計画に関する履修者の報告（1）
第11回	研究計画の作成方法（2）：研究方法の選択
第12回	研究計画に関する履修者の報告（2）
第13回	研究計画の作成方法（3）目次と文献表
第14回	研究計画に関する履修者の報告（3）
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅱに向けて

履修上の注意

全体のうち数回は担当者の講義となるが、それ以外は履修者の報告が中心となる。研究計画が十分に練られたものでないと、修士論文執筆時に苦勞するだけである。よい研究計画を作成すべく、主体的・積極的に授業に参加すること。

評価方法

履修者の報告（30%）・研究計画の内容（70%）

テキスト

履修者の研究テーマに応じて、授業時に文献や論文を指定する。

授業概要

「教育課題研究Ⅰ」での「研究計画」「課題意識」に基づき「論文題目」を決定し、部分的論文草稿を作成し、中間発表の準備を行う。優れた修士論文の作成をめざし、授業実践に関する研究テーマを確定し、研究計画及び方法の立案し、問題の深化・明瞭化を指導する。

授業計画

到達目標

1. 修士号請求論文の「論文題目」を決定する。
2. 「研究計画」及びそれにともなう「課題意識」に基づく部分的論文草稿を作成する。
3. 中間発表を行う。

第1回	授業の到達目標－修士号請求論文執筆に当たり、到達目標を確認する。
第2回	情報資料の検討－論文作成に関して、「研究計画」及び「課題意識」を踏まえて収集・解釈・整理した情報結果を発表しそれを授業参加者の考察対象とする。
第3回	データ収集方法の検討－第2回での情報資料検討議論をもとに、必要なデータ収集方法を検討する。
第4回	論文執筆の要領理解－「序文（序論／序章）」の構成等に関する検討を行う。
第4回	データ収集方法検討－第3回、第4回の授業をもとにデータ収集計画と方法を検討し、収集計画を立てる。（データ収集は計画に従い実施する）
第5回	執筆計画、データ収集計画の検討－論文執筆計画、データ収集計画等について発表し、授業参加者の考察対象とする。
第6回	データの分析－分析視点の検討－「研究計画」及び「課題意識」と「論文題目」原案を検討し、中間発表へ向けて準備する。
第7回	部分的論文草稿の検討（1）－部分的論文草稿を発表し、推敲する。
第8回	部分的論文草稿の検討（2）－部分的草稿の推敲に関して、継続収集した情報資料の解釈・整理に基づき、学校教育全体の視野からの検討を行う。
第9回	部分的論文草稿の検討（3）－部分的論文草稿の推敲に関して、教育研究様式の視点からの検討を行い、修正を行う。
第10回	部分的論文草稿の検討（4）－これまでの部分的論文草稿をもとに発表リハーサルを兼ねて報告し合い、草稿推敲の視点及び、データ継続収集の検討を行う。
第11回	部分的論文草稿の検討（5）－継続収集した情報資料の解釈・整理に基づき論文草稿の検討を行う。
第12回	論文構成の検討（1）－これまでに作成した部分的論文草稿をもとに論文全体を「論文題目」原案との関係から検討する。
第13回	論文構成の検討（2）－論文全体構成及び「序文（序論／序章）」草稿と「論文題目」原案の整合性を検討する。
第14回	中間発表準備－中間発表のリハーサルを行い、論文構成の修正を行う。
第15回	「論文題目」の決定と修士論文執筆計画立案

履修上の注意

- 授業は、教育課題研究Ⅰでの「研究計画」「課題意識」に基づき、事前に部分的論文草稿の提出が求められる。また、授業における研究討議への積極的な参加が求められる。
- データ収集の計画立案後は、研究倫理の下、計画に従い収集を行う。

評価方法

毎回の授業で提出される論文草稿とそれに基づく授業中の議論への参加状況により、課題意識が深化・明瞭化されたかにより評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅰで作成した研究計画をもとに、研究テーマに関わる文献収集を継続するとともに、予備調査・本調査を実施し、データの収集・整理を行う。そして、収集された資料やデータの分析の視点、方法を提示・討論しながら研究テーマについて考察を深め、修士論文の中間報告会での発表を行うことができるように指導する。

授業計画

到達目標

1. 修士論文の予備調査・本調査を実施し、データの収集・整理を行うことができる。
2. データの分析の視点や方法を提示・討論しながら研究テーマについて考察を深められる。
3. 修士論文の中間報告会での発表を行うことができる。

第1回	修士論文作成に向け、論文作成の手法を理科教育関係学会誌（理科教育研究、環境教育、農業教育学会誌など）を参考に再確認する。
第2回	自身の研究テーマに係わる既往研究のレビューを通して、「研究の背景と目的」部分の執筆を行う。
第3回	各自が書いた「研究の背景と目的」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第4回	各自が再考した「研究の背景と目的」部分について、文献情報を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。「研究方法」部分の執筆を開始する。
第5回	各自が書いた「研究方法」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第6回	各自が再考した「研究方法」部分について、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。予備調査を開始する。
第7回	予備調査の結果により得られたデータの集計・解析方法を検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に集計・解析を行う。
第8回	予備調査のデータを集計・解析した結果について、文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再分析し、本調査でのデータ収集や解析の方法を検討する。本調査を開始する。
第9回	本調査の結果により得られたデータの集計・解析方法を検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に集計・解析を行う。
第10回	本調査のデータを集計・解析した結果について、文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再分析し、「結果及び考察」部分の執筆を開始する。
第11回	各自が書いた「結果及び考察」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第12回	各自が再考した「結果及び考察」部分について、討論・批判的検討から得た情報をもとに修正して完成させる。
第13回	ここまで得られた成果及び今後の研究の方向性・予定などを、プレゼンテーションソフトを用いて中間報告会で発表するための準備を行う。
第14回	中間報告会に向けたゼミ内の検討会を行い、討論・批判的検討から得た情報を基に内容及び発表方法の修正を行う。
第15回	発表内容とその方法が適切であるかどうか検討する。討論・批判的検討から得た情報を基に再修正を行い、中間報告会に向けた準備を完了する。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

出席と発表内容、討論への参加状況、研究への意欲及び中間報告会での発表などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

授業概要

「教育課題研究Ⅰ」の研究テーマをもとに、学際的立場からさらに先行研究を収集し、重要とされる論文を見極め、また、研究テーマに適切な研究調査指導を行い、修士論文作成に向けて構成の指導を行う。それらをもとに中間発表の準備を行う。

授業計画

到達目標

1. 自己のテーマに関係する先行研究を見つけ出し、研究動向を整理できるようになる。
2. 主要な論文を正確に読解し、課題などを見つけ出せるようになる。
3. 修士論文に向けて、予備的調査を行えるようになる。
4. 修士論文の中間報告のための報告(要旨・資料・発表原稿)が行えるようになる。

第1回	修士課程2年目の活動とは：今後の日程と前期に必ず行うべき注意事項の確認
第2回	修士論文構成の検討と資料の妥当性：これまでの成果について客観視する
第3回	主要論文の分析①：論文の歴史的意義について考察する
第4回	主要論文の分析②：論文で取り上げられた資料の価値について考察する
第5回	主要論文の分析③：研究動向を整理する
第6回	主要論文の分析④：これまでの研究から見えてきた課題を明確にする
第7回	資料収集と分析①：収集した資料から課題に対する新知見が得られるかを検討
第8回	資料収集と分析②：継続して資料の検討を行う
第9回	資料収集と分析③：これまで収集した資料以外から課題を克服できるか検討
第10回	論文を執筆する①：「序章－問題の所在」のための研究動向について草稿提出
第11回	論文を執筆する②：研究動向に関する草稿の検討
第12回	修士論文中間報告会にむけて①：報告会のための発表資料を検討する
第13回	修士論文中間報告会にむけて②：発表リハーサルと内容の修正
第14回	修士論文構成の再検討
第15回	教育課題研究Ⅲに向けて：調査、資料収集、論文執筆の計画を確認

履修上の注意

今学期の後半には、「序章-問題の所在」の部分となる先行研究とそれらの課題について分析した研究動向の草稿まで執筆できるよう、研究計画に従い勤勉に努めること

評価方法

先行研究を正確に読めているか、また、学術論文作成で行われている研究上の手続きについて理解できているかを中心に、研究内容の深まりを総合的に評価する。

テキスト

斉藤孝『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部
その他、必要に応じてプリントを配布する。

授業概要

「教育課題研究Ⅰ」での「研究計画」「課題意識」に基づき、「論文題目」を決定し、部分的論文草稿を作成し、中間発表の準備を行う。優れた修士論文の作成をめざし、教育方法学的視点に立脚した教育実践に関する研究テーマを確定し、研究計画及び方法の立案し、問題の深化・明瞭化を指導する。

授業計画

到達目標

1. 修士号請求論文の「論文題目」を決定する。
2. 「研究計画」及びそれとともに「課題意識」に基づく部分的論文草稿を作成する。
3. 中間発表を行う。

第1回	オリエンテーション：修士号請求論文執筆に当たり、到達目標を確認する。
第2回	情報資料の検討：「研究計画」及び「課題意識」を踏まえて、収集・解釈・整理した情報結果を発表し、授業参加者と共に考察する。
第3回	データ収集方法の検討：第2回での情報資料等の検討議論を踏まえ、必要なデータ収集方法を検討する。
第4回	論文執筆の要領理解：「序文（序論／序章）」や「先行研究」等の構成方法に関する検討を行う。
第5回	データ収集方法検討：第3回、第4回の授業をもとにデータ収集計画と方法を検討し、収集計画を立てる。（データ収集は計画に従い実施する）
第6回	執筆計画、データ収集計画の検討：論文執筆計画、データ収集計画等について発表し、授業参加者の考察対象とする。
第7回	データの分析：分析視点の検討：「研究計画」及び「課題意識」と「論文題目」原案を検討し、中間発表へ向けて準備する。
第8回	部分的論文草稿の検討（1）：部分的論文草稿を発表し、推敲する。
第9回	部分的論文草稿の検討（2）：部分的草稿の推敲に関して、継続収集した情報資料の解釈・整理に基づき、学校教育全体の視野からの検討を行う。
第10回	部分的論文草稿の検討（3）：部分的論文草稿の推敲に関して、教育研究様式の視点からの検討を行い、修正を行う。
第11回	部分的論文草稿の検討（4）：継続収集した情報資料の解釈・整理に基づき論文草稿の検討を行う。
第12回	論文構成の検討（1）：これまでに作成した部分的論文草稿をもとに論文全体を「論文題目」原案との関係から検討する。
第13回	論文構成の検討（2）：論文全体構成及び「序文（序論／序章）」草稿と「論文題目」原案の整合性を検討する。
第14回	中間発表準備：中間発表のリハーサルを行い、論文構成の修正を行う。
第15回	「論文題目」の決定と修士論文執筆計画立案

履修上の注意

- 開始当初に、教育課題研究Ⅰでの「研究計画」「課題意識」に基づいた部分的論文草稿が、終了時にはその修正版の提出が求められる。
- 研究経過を研究ノートにまとめると共に、研究討議への積極的な参加が求められる。
- データ収集の計画立案後は、研究倫理の下、計画に従い収集を行う。

評価方法

毎回の授業で提出される論文草稿とそれに基づく授業中の議論への参加状況により、課題意識が深化・明瞭化されたかにより評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅰで立案した研究計画に基づき、プレ調査・本調査の実施およびデータ分析を行い、修士論文中間報告会における質の高い報告を目指す。問題解決のための具体的な提言に向けた科学的なエビデンスを得ることを目的に、妥当性・信頼性を担保しながら調査を進めることができるように指導する。

授業計画

到達目標

1. プレ調査を実施し、結果の検討から研究計画を修正する。
2. 本調査を実施し、仮説検証に向けた科学的なエビデンスを得る
3. 修士論文中間報告会にむけた報告書を作成する。

第1回	研究計画の再検討 目的と作業仮説との整合性等を含め、研究計画の最終的なチェックと修整を行いながら、より妥当性の高い計画の立案を目指す。
第2回	プレ調査の準備と成果予測 調査対象の確保や具体的な調査の手続きを確認するとともに、あり得る問題や成果を具体的に予測する。
第3回	プレ調査実施 本調査と同一の条件でプレ調査を行いながら、調査内容や手続きの不備や改善点を洗い出す。
第4回	プレ調査データ集計・分析 プレ調査の結果を集計し、調査票の信頼性や作業仮説の妥当性等を検討する。また本調査で予定している検定方法を試行し、問題があれば方法の再検討を行う。
第5回	プレ調査の結果に基づく調査方法・内容の修正 第4回において明らかになった問題点を修正し、目的にむけたより妥当性の高い調査方法・内容にむけた調整を行う。
第6回	本調査準備
第7回	本調査実施
第8回	本調査データ集計・分析・1 全ての変数の度数分布や、全てのインタビュー項目の逐語録等を作成しながら、データ分析における基礎資料の重要性を確認し、予定している分析方法の適合度を検討する。
第9回	本調査データ集計・分析・2 作業仮説に基づいた分析を進めるとともに、仮説が棄却された場合の変数の再計算や欠損値処理のあり方等を検討する。
第10回	本調査データ集計・分析・3 グラフ・表等を含めた分析結果の表現方法を検討するとともに、仮説に反したデータの考察を行う。
第11回	分析結果の考察と討議 各自の分析結果を考察・討議しながら、調査者のバイアスを除去するとともに、グループダイナミズム基に新たな視点を加えながら考察を深める。
第12回	修士論文構成の検討 論文で用いるデータの取舍選択や、考察の質および量の検討を行い、独自の主張を軸にした論文全体のストーリーをまとめる。
第13回	修士論文中間報告会にむけたプレゼン資料作成
第14回	修士論文中間報告会リハーサルと内容討議
第15回	修士論文中間報告会資料の修整

* 調査等の実施については各自の進捗状況に応じて前後する。

履修上の注意

文献講読や討議等について、自分の研究テーマとの関連に関わらず積極的に参加すること。
統計分析等の技術が十分では無い場合、授業時間外での指導を受けること。
個別に指示した参考文献・書籍等については必ず目を通すこと。

評価方法

修士論文中間報告会資料を中心に、調査の過程や取組方から総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。適宜資料を配布する。

授業概要

1年次に作成した研究計画に基づき、収集してきた資料を整理し、発達障害に関する研究テーマと研究計画、方法等を確定する。特に、仮説と仮説を検証するためのデータの関係など研究の骨子となる部分を明確にし、必要に応じて見直しを図る。再度、資料の収集・整理およびデータの収集・分析を行い、部分的な論文草稿を作成し、論文題目を決定し、中間発表を行う。

授業計画

到達目標

1. 修士号請求論文の論文題目を決定する。
2. 研究の骨子を明確にし、データの収集・分析を行い、部分的な論文草稿を作成する。
3. 中間発表を行う。

第1回	授業の到達目標と進め方について理解する。
第2回	研究計画と文献をもとに仮説の明確化を図る。
第3回	仮説と仮説を検証するためのデータの関係について検討する。
第4回	研究の骨子の確認とデータ収集方法の検討を行う。
第5回	収集した予備データの検討、方法の見直し、本データの収集について検討する。
第6回	本データを収集し、進捗状況を報告する。
第7回	収集した本データの分析の視点を検討する。
第8回	分析結果の解釈の仕方について検討する。
第9回	分析結果を解釈するための文献整理および分析の視点の見直しを行う。
第10回	必要に応じて論文題目の修正を行いつつ、部分的論文草稿を作成する。
第11回	データ分析の結果に応じて、部分的論文草稿の内容を見直す。
第12回	データ分析の結果を補完する文献を整理し、部分的論文草稿を検討する。
第13回	部分的論文草稿をもとに論文全体の構成を検討する。
第14回	中間発表の準備およびリハーサルを行う。
第15回	論文題目の決定と修士論文執筆計画立案を行う。

履修上の注意

- ・他者の研究にも関心を持ち、研究討議に積極的に参加すること。
- ・部分的論文草稿は何度も見直しを行う必要がある。積極的に提出し、指導教員のチェックを受けること。

評価方法

部分的論文草稿と、研究内容の深まりを総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

「教育課題研究Ⅰ」で作成した研究計画に基づいて、先行研究のさらなる検討を進めるとともに、論文に必要な史資料の収集を行う。収集した史資料に基づいて、論文題目および論文構成を確定させ、修士論文の部分的な草稿を作成するとともに、中間発表を行う。

授業計画

到達目標

1. 修士論文に向けて史資料の収集を行う。
2. 修士論文の概要を確定させる。
3. 中間報告の資料作成を通して、研究発表の技法を身に付ける。

第1回	オリエンテーション：1年間で何をすべきか
第2回	修士論文に必要な史資料の収集状況に関する履修者の報告
第3回	修士論文に関わる先行研究に関する履修者の報告（1）
第4回	修士論文に必要な史資料の分析に関する履修者の報告（1）
第5回	修士論文に関わる先行研究に関する履修者の報告（2）
第6回	修士論文の概要作成（1）：論文の構成
第7回	修士論文の概要に関する履修者の報告（1）
第8回	修士論文の概要作成（2）：論文の構成の再検討
第9回	修士論文の概要に関する履修者の報告（2）
第10回	修士論文に必要な史資料の分析に関する履修者の報告（2）
第11回	修士論文に必要な史資料の分析に関する履修者の報告（3）
第12回	中間報告会に向けて：限られた時間での報告内容の取捨選択
第13回	中間報告会に向けた履修者の報告（1）：発表資料の検討
第14回	中間報告会に向けた履修者の報告（2）：報告会のリハーサル
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅲに向けて

履修上の注意

全体のうち数回は担当者の講義となるが、それ以外は履修者の報告が中心となる。教育学の基礎分野の論文の質は、集める史資料の質と分析の精度に依存する。主体的・積極的に作業を進めること。

評価方法

履修者の報告（20%）・中間報告会の資料（30%）・論文の概要（50%）

テキスト

履修者の研究テーマに応じて、授業時に文献や論文を指定する。

授業概要

本授業は、「教育課題研究Ⅱ」をもとに、授業実践に関する研究の部分的論文草稿から論文構成を検討し、修士論文完成を目的とする。具体的には、毎回の授業前半に、論文草稿に関わる研究指導教員の点検事項を授業参加者全員での考察対象とし、授業後半は、研究指導教員による点検とその指導の下での草稿修正を行い、修士号請求論文の完成を図る。

授業計画

到達目標

1. 修士号請求論文を完成する。
2. 修士号請求論文内容の「学位プログラム」（学士・修士・博士の学位）上の性質を認識する。
3. 修士号請求論文内容の「研究様式」上の性質及び「社会的位置付け」を認識する。

第1回	授業計画－修士論文作成計画の確認－中間発表の意見をもとに論文全体の構成、研究計画を確認する。
第2回	修士号請求論文執筆指導－修士論文作成に関わって事前に提出された部分的論文草稿を執筆者の考え方を軸に授業参加者全員で研究討議を行う。
第3回	修士号請求論文執筆指導－論文草稿内容を「学位プログラム」「教育研究」の観点から授業参加者全員で研究討議を行う。
第4回	補充文献・データ資料の確認－第3回までの授業をもとに、修士論文作成に必要な補充文献・データ資料について点検し、収集計画を立てる。
第5回	補充文献・データ資料の結果分析－収集した補充文献・データ資料の分析について授業参加者全員の研究討議を経て、修士論文全体構成を修正・検討する。
第6回	修士号請求論文執筆指導－修士号請求論文作成に関する事前提出の論文草稿内容と資料・データの観点から授業参加者全員で研究討議し、修正する。
第7回	修士号請求論文執筆指導－修士号請求論文作成に関し、「専門職学位」の観点から授業参加者全員で研究討議を行い、修正する。
第8回	修士号請求論文執筆指導－これまでの修正を踏まえた論文草稿に対する指導教員の点検事項について、論文執筆当事者の考え方を軸に授業参加者全員による研究討議を行い論文草稿の修正を行う。
第9回	修士号請求論文執筆指導－論文草稿の修正を踏まえ「研究様式」の観点からの研究討議を授業参加者全員で行い、全体的論文草稿の検討を行う。
第10回	修士号請求論文執筆指導－全体的論文草稿について、「先行研究の成果」の観点から検討し、全体的論文草稿の修正を行う。
第11回	修士号請求論文執筆指導－これまでの修正を踏まえた全体的論文草稿を「教育実践への寄与」の観点から検討を加え、全体的論文草稿を修正する。
第12回	修士号請求論文執筆指導－全体的論文草稿を「学界の水準」の観点から授業参加者全員で研究討議を行い、全体的論文草稿の修正を行う。
第13回	修士号請求論文執筆指導－修士号請求論文の完成を促す。
第14回	修士号請求論文発表準備－修士号請求論文発表に向けて発表原稿を作成する。
第15回	まとめ－修士号請求論文提出に向けて

履修上の注意

- 各自の執筆の状況の進捗状況を明確にしながら受講し、個別指導や質疑とディスカッション、報告会などを積極的に行う。
- 修士号請求論文執筆は、事前に部分論文草稿及び全体的論文草稿を提出し、指導教員による点検を受ける。

評価方法

研究討議への積極的な参加、また、各回に提出する論文草稿により、研究経過の深化及び修士号請求論文発表原稿を総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅱ及び中間報告会を通じて明らかになった課題を修正するとともに、研究テーマに関わる文献収集を継続し、収集された資料やデータの分析、理論的・批判的討論等を通して考察を深め、修士論文を完成させ、発表会での発表を行うことができるように指導する。

授業計画

到達目標

1. 中間報告会までに明らかになった課題を修正し、研究の方向性を正しく定めることができる。
2. データを分析し、討論等を通して研究テーマについて考察を深めることができる。
3. 修士論文を完成させ、修士論文発表会での発表を行うことができる。

第1回	中間報告会で明らかになった課題や理科教育関係学会誌（理科教育研究、環境教育、農業教育学会誌など）を参考に論文の構成を確認する。
第2回	中間報告会で明らかになった課題や自身の研究テーマに係わる既往研究の再レビューを通して、「研究の背景と目的」部分の加筆・修正を行う。
第3回	各自が加筆・修正した「研究の背景と目的」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第4回	再考された「研究の背景と目的」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。
第5回	中間報告会で明らかになった課題や既往研究の再レビューを通して、「研究方法」部分の加筆・修正を行う。
第6回	各自が加筆・修正した「研究方法」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第7回	再考された「研究方法」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。
第8回	中間報告会で明らかになった課題を基にデータの集計・解析方法を再検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に改めて集計・解析を行う。
第9回	再集計・再解析した結果について、中間報告会で明らかになった課題や文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再確認し、「結果及び考察」部分の加筆・修正を行う。
第10回	各自が加筆・修正した「結果及び考察」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第11回	加筆・修正して再考された「結果及び考察」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに修正して完成させる。
第12回	ここまで得られた成果を基に「総合考察」部分の執筆を行う。そして、討論・批判的検討から得た情報を基に修正の検討を行う。
第13回	各自が修正した「総合考察」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に修正し、修士論文を完成させる。
第14回	「研究の背景と目的」から「総合考察」までの修士論文の内容を要約し、プレゼンテーションソフトを用いて修士論文発表会で発表するための準備を行う。
第15回	修士論文発表会に向けたゼミ内の検討会を行い、討論・批判的検討から得た情報を基に内容及び発表方法の修正を行い、修士論文発表会に向けた準備を完了する。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

出席と発表内容、討論への参加状況、研究への意欲及び修士論文の内容・発表などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

授業概要

2年次前期までに積み重ねた研究をもとに、大学院での学修成果として修士論文の完成を目指す。研究方法や論文執筆に当たり、データの誤りや他の論文からの剽窃などないように厳しく指導するとともに、論文作成に当たっては、常に教育の実践現場と繋がるよう意識付けを行う。

授業計画

到達目標

1. 修士論文作成のための資料収集及び社会調査について、適切に行えるようになる。
2. 修士論文作成で見えてきた課題を見極め、実際の教育との間に乖離がないか、検討する。
3. 修論作成を通して、研究者倫理を身につけ、教育者としての職業倫理につなげられるようする。
4. 大学院において学修した成果として修論を完成し、教育実践を行うための基礎となるようする。

第1回	修士論文完成に向けて：今後の日程の確認
第2回	調査資料の検討①：収集資料の検討と再度収集すべきか検討
第3回	調査資料の検討②：継続収集資料の検討
第4回	論文構成の再検討：各章の内容を検討する
第5回	修士論文の執筆指導①：各章の進捗状況と次回までの執筆の確認
第6回	修士論文の執筆指導②：進捗状況の確認と報告会資料作成の指導
第7回	修士論文の執筆指導③：院生間で論文草稿を発表し、各自の検討材料とする
第8回	論文構成の再検討：院生同士の批判をもとに構成の修正
第9回	研究者倫理について：これまでの研究を整理し、研究者の守るべきことを確認
第10回	調査資料の検討③：執筆中に収集した資料の検討
第11回	修士論文の執筆指導③：進捗状況の確認と新資料による章構成の修正
第12回	修士論文の執筆指導④：注書きと引用の適正さを確認
第13回	修士論文の執筆指導⑤：最終原稿及び研究題目名の確認と製本作業などの注意
第14回	修論完成に当たって：大学院の学修と研究成果を発表、今後の課題を明確化
第15回	修論審査に向けて：完成した論文の現代的意義の確認と審査のリハーサル

履修上の注意

論文を期限内に完成させるためには、余裕をもった作業が必要となる。研究の行き詰まりや焦りから、データの改ざんや他の論文からの無断引用、剽窃などしないよう慎むこと。発覚した場合は、本単位が認められないだけでなく、学則に従って厳正な処分が行われることになる。

評価方法

完成した論文に対する評価を主に、研究に望む姿勢、学修態度など総合的に評価する。

テキスト

斉藤孝『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部
上記以外は、適宜必要に応じてプリント配布する。

授業概要

「教育課題研究Ⅱ」をもとに、教育方法学的視点から、これまでの教育実践に関する研究の部分的論文草稿から論文の全体構成を検討し、修士論文完成を目的とする。具体的には、毎回の授業前半に、論文草稿に関わる研究指導教員の点検事項を授業参加者全員での考察対象とし、授業後半は、研究指導教員による点検とその指導の下での草稿修正を行い、修士号請求論文の完成を図る。

授業計画

到達目標

1. 修士号請求論文を完成する。
2. 修士号請求論文内容の「学位プログラム」(学士・修士・博士の学位)上の性質を認識する。
3. 修士号請求論文内容の「研究様式」上の性質及び「社会的位置付け」を認識する。

第1回	オリエンテーション：中間発表の意見をもとに、教育方法学的視点から、論文全体の構成、研究計画を確認する。
第2回	修士号請求論文執筆指導：修士論文作成に関わって事前に提出された部分的論文草稿を執筆者の考え方を軸に授業参加者全員で研究討議を行う。
第3回	修士号請求論文執筆指導：論文草稿内容を「学位プログラム」「教育研究」の観点から授業参加者全員で研究討議を行う。
第4回	補充文献・データ資料の確認：第3回までの授業をもとに、修士論文作成に必要な補充文献・データ資料について点検し、収集計画を立てる。
第5回	補充文献・データ資料の結果分析：収集した補充文献・データ資料の分析について授業参加者全員の研究討議を経て、修士論文全体構成を修正・検討する。
第6回	修士号請求論文執筆指導：修士号請求論文作成に関する事前提出の論文草稿内容と資料・データの観点から授業参加者全員で研究討議を行い、修正する。
第7回	修士号請求論文執筆指導：修士号請求論文作成に関し、「専門職学位」の観点から授業参加者全員で研究討議を行い、修正する。
第8回	修士号請求論文執筆指導：これまでの修正を踏まえた論文草稿に対する指導教員の点検事項について、論文執筆当事者の考え方を軸に授業参加者全員による研究討議を行い、論文草稿の修正を行う。
第9回	修士号請求論文執筆指導：論文草稿の修正を踏まえ「研究様式」の観点からの研究討議を授業参加者全員で行い、全体的論文草稿の検討を行う。
第10回	修士号請求論文執筆指導：全体的論文草稿について、「先行研究の成果」の観点から検討し、全体的論文草稿の修正を行う。
第11回	修士号請求論文執筆指導：これまでの修正を踏まえた全体的論文草稿を「教育実践への寄与」の観点から検討を加え、全体的論文草稿を修正する。
第12回	修士号請求論文執筆指導：全体的論文草稿を「学界の水準」の観点から授業参加者全員で研究討議を行い、全体的論文草稿の修正を行う。
第13回	修士号請求論文執筆指導：「独自性」「知見」「発想」の観点から検討し、修士号請求論文の完成を促す。
第14回	修士号請求論文発表準備：修士号請求論文発表に向けて発表原稿を作成する。
第15回	まとめー修士号請求論文提出に向けて

履修上の注意

- 各自の執筆の状況の進捗状況を明確にしながら受講し、個別指導や仲間との質疑とディスカッション、中間報告会などに、真摯かつ積極的に取り組む。
- 修士号請求論文執筆は、事前に部分論文草稿及び全体的論文草稿を提出し、指導教員による点検を受ける。

評価方法

研究討議への積極的な参加、また、各回に提出する論文草稿により、研究経過の深化及び修士号請求論文発表原稿を総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅱにおける調査・分析の結果に基づき、修士論文の最終的な完成を目指す。科学的根拠に基づくことはもちろん、問題解決のための具体的な提言に繋がること、幼稚園・小学校等における教育実践に寄与することを条件に、十分な水準を担保した修士論文となるように指導する。

授業計画

到達目標

1. 科学的な根拠に基づいた仮説検証を行う。
2. 先行研究との関係を明確にした独自性を明確にする。
3. 具体的な提言に基づき教育実践に寄与し得る修士論文を完成させる。

第1回	修士論文中間報告会における指摘事項の確認
第2回	修士論文中間報告会における指摘事項への対応
第3回	分析方法の再検討、再分析および相互検算・1 中間報告会等での成果を踏まえ、仮説の検証により効果的な分析方法を再検討するとともに、分析方法に大きな変更が無かった場合も始めから再分析を行い、第三者による計算のチェックを受けることで、データの信頼性を確保する。
第4回	分析方法の再検討、再分析および相互検算・2
第5回	図表の表現等の再検討 グラフや表等について、データの表現として適切であるか、複数の表現方法を比較することで検討し、「何を表すか」と同様に「どうやって表すか」ということの重要性を知る。
第6回	先行研究の再確認と参考資料の追加を通じた研究の独自性の確認 一連の調査分析・考察の概略をまとめた後、改めて先行研究を見直すことで、自身の主張の独自性や、その根拠となるエビデンスの妥当性を再確認する。
第7回	修士論文作成と進捗状況の発表・1 第6回までの内容を踏まえ、各論的な修正を踏まえながら、修士論文本体の作成を行う。参加者は毎週進捗状況の報告を義務づけ、無理なく論文作成が可能なスケジュール管理を徹底する。
第8回	修士論文作成と進捗状況の発表・2
第9回	修士論文作成と進捗状況の発表・3
第10回	修士論文作成と進捗状況の発表・4
第11回	修士論文作成と進捗状況の発表・5
第12回	修士論文第一稿発表 第一稿を比較的早く提出することで、全体の構成の調整や部分的な再分析を可能にし、論文としての完成度を高めることを目指す。
第13回	修士論文発表会プレゼン資料の作成と修士論文の修整
第14回	修士論文発表会リハーサルと修士論文の修整
第15回	修士論文最終稿発表および校正

* 各回の内容は各自の進捗状況に応じて前後する場合がある。

履修上の注意

修士論文作成にあたっては余裕を持って取組み、スケジュールを厳守すること。論文が水準に満たない場合は、修士論文発表会への参加を認めない場合がある。

評価方法

修士論文の内容を中心に総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。適宜資料を配布する。

授業概要

2年次前期までに積み重ねた発達障害に関する研究について、データ収集と分析を行い、仮説を検証する。それまでに作成した部分的論文草稿と照らし合わせ、論文構成を見直しつつ、研究の限界と課題を明確にし、修士号請求論文を完成させる。また、修士論文の発表を行う。

授業計画

到達目標

1. 修士号請求論文を完成させる。
2. 発達障害研究における修士号請求論文の内容の位置づけを認識する。
3. これまでの一連の研究活動を通じて、発達障害のある児童への教育的支援を実践する高度専門職としての専門性を身につける。

第1回	中間発表の意見をもとに論文全体の構成、研究計画を確認する
第2回	中間発表の意見をもとに論文の見直しを図る
第3回	収集・分析したデータによる仮説の検証方法を検討する
第4回	分析結果と仮説の一致・不一致箇所を確認する
第5回	分析結果と仮説の一致箇所に関して解釈し、文献整理を行う
第6回	分析結果と仮説の不一致箇所に関する文献整理の仕方について検討する
第7回	仮説と結果の対応関係について検討し、論文構成を図式化する
第8回	結果に用いる図表と分析結果を定める
第9回	研究対象や方法を整理し、必要に応じて文献による補完を行う
第10回	序論の内容を見直し、必要に応じて文献による補完を行う
第11回	結論の内容を見直し、必要に応じて文献による補完を行う
第12回	研究の限界と将来の課題について検討しつつ、文献による補完を行う
第13回	修士号請求論文内容を全体構成の観点から検討し、論文完成を促す
第14回	修士号請求論文発表に向けて原稿を作成する
第15回	まとめ 修士号請求論文提出に向けて

履修上の注意

- ・研究と執筆を計画的に行い、その進捗状況を適宜報告すること。
- ・修士号請求論文は繰り返し見直しをする必要があるため、積極的に提出し、指導教員のチェックを受けること。

評価方法

論文草稿、研究の進捗状況及び修士号請求論文発表原稿により評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

2年次前期までに積み重ねた成果をもとに、修士論文を完成させる。卒業論文と異なり、修士論文は一定の学術的な価値が求められるものであることを考慮し、それに堪える論文となるよう指導する。合わせて、修士論文完成後には発表を行う。

授業計画

到達目標

1. 修士論文を完成させる。
2. 論文の推敲を通じて、学術論文として必要な要素を理解する。
3. 最終報告の資料作成を通して、研究発表の技法を身に付ける。

第1回	中間報告会での指摘内容の検討
第2回	修士論文の内容の確定
第3回	修士論文に必要な史資料の分析に関する履修者の報告 (1)
第4回	修士論文に必要な史資料の分析に関する履修者の報告 (2)
第5回	修士論文の進捗状況の報告 (1)：序章
第6回	修士論文の進捗状況の報告 (2)：書き終わった部分から順次
第7回	修士論文の進捗状況の報告 (3)：書き終わった部分から順次
第8回	修士論文の進捗状況の報告 (4)：書き終わった部分から順次
第9回	修士論文の全体の構成の確認 (1)
第10回	修士論文の進捗状況の報告 (5)：加筆修正が終わった部分から順次
第11回	修士論文の進捗状況の報告 (6)：加筆修正が終わった部分から順次
第12回	修士論文の進捗状況の報告 (7)：加筆修正が終わった部分から順次
第13回	修士論文の全体の構成の確認 (2)：最終チェック
第14回	最終報告会に向けた履修者の報告 (1)：発表資料の検討
第15回	最終報告会に向けた履修者の報告 (2)：報告会のリハーサル

履修上の注意

修士論文作成の最終段階であり、授業の大半は進捗状況の報告となる。
修士論文は執筆者の学識証明でもあるという点をふまえて、論文の執筆に勤しむこと。

評価方法

履修者の報告 (20%)・最終報告会の資料 (20%)・修士論文の内容 (60%)

テキスト

履修者の研究テーマに応じて、授業時に文献や論文を指定する。